

比較文化研究所年報

第 12・13 号

2018・2019

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告（2018年度）	
1. 研究部会報告	
(1) 欧州部会	5
(2) 外国語教育研究部会	6
(3) 健康文化研究部会	7
(4) 地域博物館研究部会	8
(5) 福祉コミュニティ研究部会	10
(6) 文化財保存科学研究部会	15
(7) 民事法研究部会	17
(8) 地域社会経済研究部会	17
(9) 地域精神保健福祉研究部会	20
(10) 心理教育研究部会	22
(11) 会計専門職研究部会	24
(12) 日本アジア比較文化研究部会	27
(13) 歴史科学研究部会	29
(14) 筑後川流域圏研究部会	31
(15) イスラーム研究部会	42
(16) 地中海地域研究部会	43
2. 研究員発表会	47
3. 日誌（運営会議、研究所会議等）	50

活動報告（2019年度）

1. 研究部会報告

(1) 欧州部会	51
(2) 外国語教育研究部会	52
(3) 健康文化研究部会	55
(4) 地域博物館研究部会	56
(5) 福祉コミュニティ研究部会	58
(6) 文化財保存科学研究部会	60
(7) 民事法研究部会	62
(8) 地域社会経済研究部会	62
(9) 地域精神保健福祉研究部会	65
(10) 心理教育研究部会	67
(11) 会計専門職研究部会	69
(12) 日本アジア比較文化研究部会	73
(13) 歴史科学研究部会	75
(14) 筑後川流域圏研究部会	77
(15) イスラーム研究部会	85
(16) 地中海地域研究部会	85
2. 研究員発表会.....	88
3. 日誌（運営会議、研究所会議等）	91
施設・設備	92



は じ め に

比較文化研究所長 満園 良一

2018・2019年度の活動報告として、久留米大学比較文化研究所年報第12・13号をお届けします。

本研究所は文系大学院の設置母体として出発し、主に比較文化研究科設置に貢献するとともに教育・研究をも担ってきました。その後、2001年から専門研究部会が設けられ、当初の5部会から16の研究部会にまで増え、現在の活動に至っています。それぞれの研究部会では、調査研究、そして地域にも開放された公開講座、シンポジウムやセミナー等の様々な研究活動を行っているところです。

これまでも比較文化研究所としての学際的・総合的研究活動の推進と、成果の社会還元を続けてきましたが、今後も一層の共同研究の進展は必要であると考えられます。

本研究所の活動が、所員や地域の方々を始め様々な関係者に支えられてきたことに感謝申し上げ、今後とも関係各位の皆様のご指導、ご支援を頂きたく宜しくお願い致します。

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（現在の比較文化研究科長）が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も大学院担当教員を中心にその他の希望する専任教員にまでその枠が広げられました。

研究所では、多くの研究部会を組織しそれぞれのテーマで活発な研究活動を行うとともにその成果の公開に努めています。

ほかに研究所としての活動として、次のような研究プロジェクトを実施してきました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を開始しました。2006年度～2007年度においては、大川地域、2008年度～2009年度においては旧三潴郡、2010年度～2011年度においては旧久留米市、2012年度～2013年度においては、うきは市および朝倉市、2014年度からは日田地区を実施し、それぞれの地域の『研究報告書』を発行してまいりました。

以上の研究プロジェクトは2015年度をもって終了しています。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

2018・2019年度においては次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長	満園 良一（2018.4.1～2020.3.31, 2020.4.1～2022.3.31）
専任所員(任期制)	北村 修二（教授）（2014.4.1～2019.3.31） Ahmed M F M Rahmy（教授）（2017.4.1～2022.3.31）
客員教授	森 醇一郎
所 員	2018年度：88名（専任所員2名含む） 大学院比較文化研究科後期博士課程の教員29名 大学院心理学研究科後期博士課程の教員7名

	任意に加入する助教以上の教員50名
	2019年度：83名（専任所員1名含む）
	大学院比較文化研究科後期博士課程の教員27名
	大学院心理学研究科後期博士課程の教員7名
	任意に加入する助教以上の教員48名
特別研究員	2018年度：7名，2019年度：2名
研究部会研究協力者	9名（文化財保存科学研究部会8名、福祉コミュニティ研究部会1名）
研 究 員	2018年度：22名，2019年度：20名

専任所員は、講師以上の教員で、任期制をとっています。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2018・2019年度における研究部会は以下の通りです。

- 1) 欧州研究部会（部会長 児玉昌己教授）
- 2) 外国語教育研究部会（部会長 李 偉教授）
- 3) 健康文化研究部会（部会長 満園良一教授）
- 4) 地域博物館研究部会（部会長 吉田洋一准教授）
- 5) 福祉コミュニティ研究部会（部会長 濱崎裕子教授）
- 6) 文化財保存科学研究部会（部会長 原口雅浩教授）
- 7) 民事法研究部会（部会長 石川真人教授）
- 8) 地域社会経済研究部会（部会長 大矢野栄次教授）
- 9) 地域精神保健福祉研究部会（部会長 辻丸秀策教授）
- 10) 心理教育研究部会（部会長 2018年度：木藤恒夫教授，2019年度：園田直子教授）
- 11) 会計専門職研究部会（部会長 杉野博貴教授）
- 12) 日本・アジア比較文化研究部会（部会長 アハマド・ラハミー教授）
- 13) 歴史科学研究部会（部会長 福山裕夫教授）
- 14) 筑後川流域圏研究部会（部会長 浅見良露教授）
- 15) イスラーム研究部会（部会長 2018年度：古賀幸久特任教授，2019年度：佐々木拓雄准教授）
- 16) 地中海地域研究部会

（部会長 2018年度：畠中 昌教准教授，2019年度：池口守准教授）

研究員は、後期博士課程を満期退学した者で、その後も研究を続け博士学位論文の作成を目指す者等が含まれます。指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

審 議

比較文化研究所には、主として次の2つの審議組織があります。

研究所会議：所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する審議を行います。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長からなる組織で、16名の委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な審議機関となります。

また、学部等との連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、副学長、学部長、大学院研究科長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されています。

研究成果の公表

『比較文化研究』

研究所の紀要として原則として年1回発行しています。1987年に『比較文化研究所紀要』第1輯を発行し、1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と改称しています。

また、2009年度より査読制をとっております。

第54・55輯の主な内容は、以下の通りです。

『比較文化研究』第54輯（2018年3月発行）

- 論 文 篠倉大樹「久留米藩における物流政策の変化に関する一考察」
論 文 池田博章「小学生のQOLの変化に関する研究：夏休み中の学習支援の事例より」
資 料 平成30年度研究員研究発表会抄録

『比較文化研究』第55輯（2019年3月発行）

- 論 文 坂田直樹「英語学習者の統語構造獲得に結びつく諸要因」
—文法知識・インプット量の観点から—
Constructs of EFL Syntax Development: Exploration from Explicit and Implicit Learning Perspectives
論 文 池田博章「子どものQOLとSDQの関連性に関する検討令和元年度研究員研究発表会抄録」
資 料 令和元年度研究員研究発表会抄録

『比較文化研究所年報』（本冊）

比較文化研究所における1年間の研究成果の報告および学外への周知を目的に、2008年度（2007年度の報告）より発行を開始しました。

各研究部会・研究員の研究成果の公表

各研究部会などにおいても出版物等による研究成果の発表が行われています。

詳細につきましては、各研究部会等の報告（後述）をご参照ください。

また、研究員につきましては、2006年度から年度末に研究員研究発表会を開催し、その年度における研究成果の発表が行われています。

活動報告（2018年度）

1. 研究部会報告

(1) 欧州研究部会

2018年度久留米大学比較文化研究所欧州部会は、下記のごとく、2019年3月1日、イギリス離脱の決定を受けたBrexitとEUの将来という共通論題で1度行った。

2016年で総計8回の公開講座を開催したことを考えると、予算上の制約は如何ともしがたい。

神戸大学からの研究者をはじめ、福岡市民など30名弱の参加者があり、EUの現状分析を日経の瀬能繁（元ブリュッセル支局長）、イギリス出身のスティーブン・デイ（大分大経済学部教授）と私の3名で実施した。

瀬能氏はBrexitの無謀さについて、そのネガティブな影響を指摘、またスティーブン・デイ教授は北アイルランドの分離の住民投票の可能性にも言及された。私は5月の欧州議会選挙への影響は、ナショナリストの議席増とその影響、spitzenkandidatenの展開、欧州委員会の政治化について指摘した。

会場は久留米大学福岡サテライト教室（福岡市中央区天神1-4-2 エルガーラ・オフィス6階）

共通論題 英のEU離脱（Brexit）とEUの将来

日時 平成31年3月1日（金）14：00～16：00

場所 久留米大学福岡天神サテライト教室

（福岡市中央区天神1-4-2 エルガーラ・オフィス6階）

シンポジウム

瀬能 繁（日本経済新聞国際アジア部次長）

「英国とともにEUは没落するか 経済の視点から」日本語

スティーブン・デイ大分大学経済学部教授

‘How deep does the rabbit hole go? The EU and the UK in 2019’ 英語通訳なし

児玉 昌己（本学法学部教授）

「EU進展か停滞か EU統合の主戦場としての欧州議会と選挙」日本語

各25－30分の報告の後3名での討論

司会・パネラー：児玉 昌己（久留米大学法学部教授）

参加費：無料

定員：先着80名 その時点で締め切ります 申し込み不要（直接、会場にお越しください。）

問い合わせ：久留米大学福岡サテライト教室 092-7373-1111

（文責 児玉 昌己）

(2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットーに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2018年度は、特別企画として久留米大学外国語教育研究所と共催し、「HUMAN LIBRARY @ 久留米大学」を開催した。ヒューマンライブラリーの「本」として7名にお願いした。参加者は本学教員、学生計25名であった。

タイトル：第1回ヒューマンライブラリー@久留米大学

日 時：平成30年12月9日 日曜日 13:50～16:00

場 所：久留米大学御井学生会館3F ミーティングルーム3

内 容：ヒューマンライブラリーは人を本になぞらえ、図書館で本を読むように、様々な人と積極的に対話し、理解を深める取り組みである。

ブックリスト：

	作者名	本のタイトル	あらすじ
A	車いす トラベラー	コロコロと	事故は体の自由を奪ったけれども、新しい人生を開く機会を与えてくれた。車いすで辿ってきたこれまでの旅路について紹介する。
B	がん サバイバー	余命告知から 12年	家族へ余命1か月と伝えられたのは12年前。一時に私も家族も「死」を覚悟したが、4度の手術、3度の生命の危機を乗り越え、幸い3年で闘病を終えることができた。信頼できる医師との出会い、家族、友人、そして病気になったことで出会った方たちの支えに今は感謝している。私の経験が患者さんたちの励ましになればと現在は「がんサロン」でボランティアをしている。 今回患者としての不安な気持ちを持ちながら歩んできたサバイバーとして話したいと思う。
C	ハーフ	2つの文化に 挟まれて	「ハーフいいな」「羨ましい」って多くの人は言うけれども、果たして「ハーフ」であることは本当にいいことなのだろうか。ペルーと日本の間を行ったり来たりを繰り返す。そこに揺れ動きながら体験したことをエネルギー源としてこれからも前に進んでいく。
D	エジプト 留学生	エジプト革命	2010年から2012年にかけてアラブ世界において「アラブの春」が発生した。前例にない大規模反政府（民主化要求）デモや抗議活動を主とした騒乱のことである。2010年12月17日にチュニジアで警察官女性に顔を強打され、売り場として使っている車も警察官に強制収容されたモハメッド・ブウアジジ

			という人がそのせいで、焼身自殺した事件をきっかけに、反警察・反政府デモがチュニジア国内全土に拡大した。それから、アラブ世界にも波及し、各国にデモが発生した。 エジプトの場合は、最初に、国民に対する警察の不正・暴力・蛮行・抑圧行動に対して、警察の日（1月25日）2011年に反警察若者デモが起こった。結局このデモは「怒りの革命」に進化した。結局どんな流れで行ったかという話を届けたいと考えている。
E	ボナペティ	STOP! 子どもの食と心の貧困	私たちは、2014年『子供の貧困対策法』の施行より勉強会を始め、同年6月から現在までに、子どもたちを支える4つの活動を中心に行っている。今年スタートした『ぎおんさんの森食堂』は、地域の高齢者、地元の大学生も参加して子どもたちとカレーライスを作って食べている。歩いて行ける距離に子どもたちの居場所がたくさんできてほしいと願っている。
F	フランス人	私はなぜここにいるの？	私はアルジェリアで生まれた。父の家系は地中海のイビサ島からフランス統治下のアルジェリアに移住してきた。母の家系はフランス東部からのアルジェリア移民だ。アルジェリア戦争の影響で私たち一家はフランスに移り、私はフランスで育った。その後私は日本で暮らすようになり、20数年後の今も日本で暮らしている。
G	ボランティア	被災地とボランティア（支援）	ボランティアって例えると「特効薬」。凄い力を持っている！けれども危険性もあるんだよ。 そんな経験知識を得ながら、地域社会に新たな可能性、ボランティアを浸透させようと奮闘中の作者の物語。

上記の「本」の皆さんから個人の体験を話し、参加者たち全員は、初めての経験ではあるが、「本」への質問などを通じて、積極的にコミュニケーションをとることができ、異文化交流を行うこともできた。

（文責 李 偉）

（3）健康文化研究部会

久留米・筑後地区の健康・スポーツ科学データの集約化について2016年度から自治体などと協議を進め、既存のデータとして小・中学校における新体力テストの共有化を目指した。しかしながら、個人情報扱いなど種々の提示を受け共有化に至っていない。同時に、2017年度からデータ収集に向け検討していた就学前児童である幼稚園（園児200人強の規模）の園児について2018年度に体力テスト

を実施出来たが、その内容は以下の通りである。また、就学後の小学校（3校）・中学校（1校）に繋げられるよう連続性を念頭に置いた協議も進めている。

測定日時：平成31年2月5日（火）10時00分～12時30分

場所・対象：広川幼稚園・園児（年少、年中、年長の計）248名

測定項目：25m走・立ち幅跳び・ボール投げ

バランスクロスステップウォークテスト（BCW）の4種目

なお、結果報告は令和元年8月29日（木）に園の先生方、9月21日（土）保護者に行う。

以上の現場におけるデータベース化の一步を踏み出しつつ、以下の通り、第7回比較文化研究所健康文化講演会を開催した。久留米市を始めとする福岡県南の関連する行政担当者、学生などに向け、運動によるコミュニティづくり、運動による医療費削減の2つを大きなテーマに、久野先生による過去、現在、これからを具体的に、つまり数字の裏付けをもって話を進めて貰った。散見された一般の方々、大学、病院関係の方々にも、副題にあった「自分のまちが手遅れにならないために」というメッセージは、「健康」から「健幸」と置き換えた想いととも届いたものと思う。そのために必要なことは、従来から健康に必要な「運動」「食」の2つ、特に「運動」の情報が必要な方々に届いていない、と言うより（7割前後だったように記憶している）無関心をどうするか？つまり、これまでの2、30年にわたる施策が効果を挙げていない、指摘はかなり刺激的だった。今後、施策そのものが間違いなく大きな市町村格差を生みますと言う指摘とともに、そうならないために人と人の関係づくり、つまり「コミュニティ」の存在と機能が欠かせず、発想の転換が必要であるというメッセージは、行政だけでなく大学教育の根幹にも関わる内容であった。社会を変えていく人材養成がスポーツや健康の分野で可能か、と言う事を問われていると思う。

比較文化研究所 第7回健康文化研究会

開催日時：平成31年3月1日（金）18時00分～20時00分

場所：久留米大学御井本館3階 13BC 教室

特別講演「このまちに住むと自然と健幸になれるまちづくりとは」

—自分のまちが手遅れにならないために—

久野 譜也先生（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

（文責 満園 良一）

(4) 地域博物館研究部会

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持し地域文化を継承していくことを目的とする。

運営（研究）計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）

③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2018年度の活動報告

①史料調査

2016年度より御井図書館所蔵の久留米藩政史料（仮）の調査を実施中である（詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第10号』2017年、参照）。

②明治維新150年記念事業「眞木和泉守と筑後の文化」平成30年7月21日（82A）

主 催 眞木和泉守研究会 久留米大学比較文化研究所（地域博物館研究部会）

後 援 福岡県教育委員会 久留米市教育委員会 筑後市教育委員会 久留米郷土研究会

協 力 水天宮 眞木和泉守保臣先生顕彰会

参加者 約150名

「明治維新の草莽崛起の源流となった眞木和泉守、その和泉守の漢学、和歌、および謫居山梔窩にあつた水田天満宮の文化的土壌を概観し、維新の策源地となった筑後の文化・歴史を多角的視点から考える報告会です。（当日チラシより）」



【当日会場風景】

③頼山陽フォーラム記念講演Ⅱ（吉田）

平成30年11月3日（土）於：耶馬溪公民館文化ホール

演題「頼山陽と九州の儒者たち」

④低平地研究会講演会

日 時：平成31年2月21日（木）15:00～

場 所：佐賀大学図書館4F会議室

演 題：佐賀藩の鷹狩りと低平地

講演者：伊藤 昭弘氏（佐賀大学地域学歴史文化研究センター副センター長）

企画・主催：低平地研究会歴史・文化専門部会

共 催：佐賀大学地域学歴史文化研究センター

久留米大学比較文化研究所 地域博物館研究部会

内 容：鷹・鷲を用いた狩猟は古くから世界各地で行われ、日本でも、古代から貴族や武士たちに愛好されました。江戸時代には、各地の大名が将軍へ鷹を進上し、将軍は獲物を大名たちへ下賜するなど、幕藩関係を支えるツールのひとつとして存在しました。諸大名たちもさかんに鷹狩りを実施しましたが、その実態解明は不十分です。佐賀藩についても、鷹狩りや鷹場（鷹狩りを行う狩場）にかんする研究は皆無です。本講演では、おもに佐賀藩初代藩主勝茂の鷹狩りについてご紹介します（当日チラシより）。特に旧小城郡・杵嶋郡は、当時鶴の飛来地として有名であったということです。

参加者：38名



【当日講演風景】

⑤ニューズレター（vol.10）の発行（予定）

CONTECTS

明治維新150年記念事業「眞木和泉守と筑後の文化」.....	2－ 3p
頼山陽フォーラム.....	3p
低平地研究会講演会.....	3p
寄稿「福岡県公文書館」	4p

（文責 吉田 洋一）

(5) 福祉コミュニティ研究部会

平成30年度は、一昨年から研究対象としている「子ども食堂」について、昨年度の久留米市での子ども食堂活動の実態調査と意見交換会に続き、その事例視察や、子どもの貧困をテーマとする講演会を開催した。以下に、その成果について報告する。

研究・活動課題名

- I. 大学周辺の地域住民との交流によるまちづくり実践研究（継続）
- II. 子ども食堂事例調査（久留米市内、東京都豊島区）
- III. 子どもの貧困をテーマとする講演会と意見交換

I. 久留米市東合川校区 子ども食堂の視察

昨年度の久留米市内の子ども食堂活動実態調査に基づき、そのなかでも特に参加者数が多く、小学校ではカバーできない教育機能と、子供会活動の低迷に対応する機能を有していると考察された東合川校区の子ども食堂の視察を行った。

視察日時 2018年4月21日（土） 10時～13時

場 所 久留米市東合川校区コミュニティセンター

1) 活動概要

名 称：「ふれあい食堂」 活動開始時期：2016年3月

動 機：校区活動計画で高齢者と子どもを対象にした地域食堂の開催を決定

活 動 日：毎月第3土曜日 11:00～13:00

場 所：東国分コミュニティセンター

対 象：幼児、小学生とその親／兄弟、高齢者 平均参加人数：約130人

メニュー：カレーライス（甘口、辛口） お替りは1杯まで

参 加 費：子ども100円、大人200円

材料の調達手段：寄付、フードバンク、購入

活動資金：市の補助金と売り上げ 補助金では食事用トレイ・食器などを購入

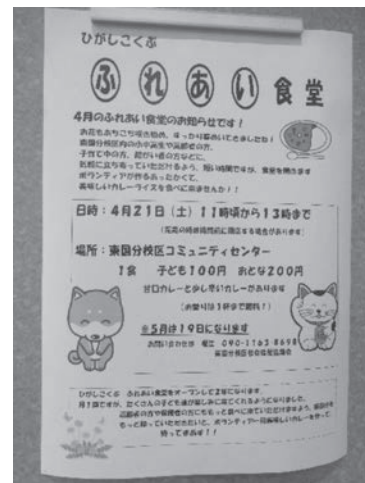
食事以外の活動：ゲーム、読書、風船遊びなど

連 携 者：地域のボランティア、介護施設の栄養士・介護士

2) 活動状況

11時からの開催にも関わらず、10時過ぎには子どもたちが集まり始め、風船遊びやゲームをしながら、受付が始まるのを待っていた。主に小学校3～4年生の参加が多いが、その他の学年の子どもや幼児、親子連れ、高齢者も少数ではあるが連れ立って参加していた。受付が始まると名簿に学年と名前を書き、100円を払ってプラスチック番号札をもらい、それをカレーと交換する仕組みである。

人数が多いため、厨房前の食堂ばかりでなく、玄関ホールにも臨時に机・椅子を並べて食事できるようにしていた。11時過ぎると仲良しグループごとに列を作って並び、順番に席を交代しながら食べていた。トレイにはカレーの他に袋入りの駄菓子があり、これはドラッグストアで賞味期限直前のものをフードバンクに集め、提供していただいている。



ヒヤリングによれば、子どもの貧困対策として始めたわけではなく、地域で子どもを育てるという目的の活動で、保護者や高齢者との交流も大事にしているそうである。調理や準備に13～14人のボランティアが関わり、この活動を通して子どもや若い親たちと顔見知りになることにも意義を見出していると考察される。

II. 子どもの貧困に関する講演会

1 背景・目的

御井町でフードドライブ（農家の米・野菜の寄付や商店の余りの商品を集めて、それらを必要とする人々に分配する活動）をしており、昨年より旧公民館で月に1度の多世代交流の食堂も開催しているボナベティを中心とする市民グループが、法政大学の湯浅誠先生の講演会を開催するために大学への協力を求めた。

講演会の目的は、子ども食堂の意義についての研究や講演が多く、その運営理念などに関する指導では第一人者の湯浅誠先生に、近年、厚労省がテーマとしている「地域共生社会」と結びつけて話していただき、現在とこれからの地域社会のあり方を市民と一緒に考えることである。

2 講演会の概要

開催日時：2018年10月22日 場所：久留米大学51A 教室

参加者：学生（経済学部、法学部、人間健康学部）・教員、市民グループ、行政関係者

主 催：比較文化研究所福祉コミュニティ研究部会
 共 催：法学部、経済学部、人間健康学部総合子ども学科
 参加人数：約180名

3 講演の内容と考察

子どもの貧困対策として「子ども食堂」を捉えようとする傾向が強いが、その方向の動きは効果がなく、逆に「地域交流の促進：にぎわいを地域に創る」ことの一つの形として「子ども食堂」があることによって、本当に貧困による問題に陥ることを防ぐことになり、ひいては子どもの貧困対策になるという流れにしなければならない。その意味では予防的なものであり、住民がやりくりしながらつくる「誰でも行ける居場所」である。貧困のために犯罪などに繋がってしまった子どもに対応するのは行政の役目であり、その役割分担が必要である。

子ども食堂の意義は、多様な経験をする場、多様な大人に触れ合う場、社会性を身につける、学習支援・語彙が増える、家庭でできないことを補う、人生の選択肢が増える等であり、それは福祉を超えるものである。

2年間で2,000カ所も増えている要因は、制度化されていないことや、肌感覚にフィットするものであり、リアルなつながりがほしい、体験や時間を共有したいという人々の気持ちに適合するためである。

4 参加者の感想と考察

講演会後のアンケート調査によれば、市民からは、「子どもの貧困」というイメージが変わった、自分たちの地域や生活のなかで考えるべきことが明らかになった。子ども食堂が社会性をつける役割を果たすことが分かった、等の意見。

学生からは、修学旅行に行けない子どもの例を通して、小さなことが孤立やいじめに発展することが、分かった。真の貧困に陥る手前の子どもに気づき、支える保育者になりたい。「子どもの貧困」の根本的原因はお金のことばかりでなく、人との交流がないことや、いろいろな体験をしていないことにもあることが分かった、等であった。

湯浅先生の講演は事例に基づく分かりやすい内容であったため、学生にとって良い学びとなり教育効果があった。また、講演会には多くの市民が参加し、大学で学生と市民がともに現代社会の問題を考える良い機会となった。このような場を今後も持ちたいと考える。そして、地域に交流の場が増え、子どもを地域で育てる福祉コミュニティが形成されるように、今後も貢献していきたい。



「子どもの貧困」と地域共生社会

2013年に『子どもの貧困対策法』が成立しました。厚生労働省の国民生活基礎調査によると、日本は米国、中国に次ぐ世界第3位の経済大国でありながら、子どもの7人に1人が貧困の状態にあると報告されています。
 少子高齢化、子育て世帯の相対的貧困の実態や課題、目指すべき地域共生社会とは何か、全国の最新事例を交えながら講義を行います。

日時/10月22日(月)10:45~12:00 (受付開始10:30~)
 会場/久留米大学 500号館 51A教室
 ＊公共交通機関を使用し、お車の場合は周辺有料駐車場をご利用ください。

講師/湯浅 誠 氏
 (法政大学教授/社会活動家)

参加費：無料(申し込み不要)

プロフィール/湯浅 誠 氏
 民主主義を再考し、誰もが尊重される世の中をつくりたい。
 1969年東京都生まれ。東京大学法学部卒。1995年よりホームレス支援、生涯学習支援に従事。2009年から足掛け3年間内閣府参事に就任。内閣官庁社会的包摂推進室長。現在、法政大学現代福祉学部教授の他、NHK第一ラジオ「マイあさラジオ」、文化放送「大竹まことゴールデンラジオ」レギュラーコメンテーター。
 著書に『「なんとかする」子どもの貧困』(角川新書、2017年9月刊)ほか

主催：久留米大学比較文化研究所福祉コミュニティ研究部会
 共催：久留米大学人間健康学部総合子ども学科・久留米大学経済学部・久留米大学法学部
 〒812-8580 久留米市大里4-1-1 久留米大学 500号館 51A教室 TEL:0942-931-4411 FAX:0942-931-4412

Ⅲ. 先進事例の視察（東京都豊島区）

視察日時 2019年2月26日(火) 15時～19時

場 所 豊島区民会館 金剛寺貸室

NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

本 NPO は、豊島区で「地域の子どもの地域が見守り、学びや暮らしを有機的に支えるネットワークをつくり、子どもの未来を明るく変えていきたい」「さまざまなカタチの居場所を通じて信頼できるおとなや若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性がある」というミッションのもとに活動している。

地域での子育てに包括的に取り組んでいる NPO として、全国的に注目されている。その事業は「暮らしサポート」「遊びサポート」「学びサポート」の3つの分野であり、池袋本町プレーパークに遊びに来た子どものつぶやきを聞いた栗林さんが無料学習塾を始め、子ども食堂等の活動も展開している。

活動の中でも注目されるのは、2014年から行っている「夜の児童館」である。「何故、夜なのか」という質問には、「子どもが犯罪や非行に走るのは夜の孤独である」との回答であった。夜の児童館は10人の固定メンバーで親との合意のもとに精神保健福祉士と保育士が中心となり、大学生のボランティアとともに食事や遊びを通して子どもと家庭支援を行っている。

また、WAKUWAKU ホームは、宿泊機能をもつ拠点として民家を借り上げ、NPO の事務局長が住み込んで、いつでも笑顔で子どもを迎えいれている。保護者が疲れたときや親子関係が煮詰まったときに、子どもが泊れる場所があることにより、ストレス解消や虐待予防になっている。近年、問題になっている児童相談所で一時保護されると地域の日常生活から切り離されることになるが、このホームでは学校に継続的に通うことができる。



無料学習塾には大学生がボランティア登録をしており、地域の高齢者と共に、若者が子どもを支援するしくみがある。また外国人の多い豊島区であることから日本語教室もあり、多様な地域のニーズに応えている。

以上のように、本年度は「子ども食堂」をテーマに研究活動を行ってきたが、湯浅先生の講演でもあったように、そこは貧困の子どもを含めて食事を一緒にする場所という以上にコミュニティの子育て機能を強化する場所としての意義が大きいと考察できる。今後も福祉コミュニティ研究部会としては、地域社会での動きに着目し、それがコミュニティや多様な住民にどのように作用するか、福祉的な視点から捉えていきたいと考えている。

(文責 濱崎 裕子)

(6) 文化財保存科学研究部会

1. イタリア事業（イタリア レクチャー・デモンストレーション・ワークショップ）

2018（平成30）年5月15日にローマで、久留米大学文化財保存科学研究部会主催の八女手漉き和紙・久留米絣の実演と解説を行なった。同時に八女伝統工芸館が制作した英語パネルによる展示・紹介も行い、同年11月に福岡で開催される「伝統的工芸品月間国民会議全国大会」の宣伝を行なった。その後、16～18日にフィレンツェで開催される文化財保存国際学会（Heri-Tech）に参加し、ブースでの展示と小講義室での解説を行なった。

団員リスト：団員名と役割

《大学教員》

狩野啓子（団長，プロデューサー，講演者），神本秀爾（会場設営責任者，通訳）

大場はるか（会場設営補助，通訳），矢野英子（司会，通訳）

《伝統工芸実演者》

溝田俊和（八女手漉き和紙），松枝哲哉（久留米絣），松枝小夜子（久留米絣）



ローマ日本文化会館 HP 用ポスター
（ローマ日本文化会館制作）



Heri-Tech ブースでの訪問客対応



久留米絣の解説



八女手漉き和紙実演

財政面の支援

国際交流基金助成に採択され、それと同時に、支援者からの寄付、関係自治体（八女市・久留米

市・うきは市)と久留米大学の支援協力があった。さらに、ローマ日本文化会館と秋山信茂氏のご協力によりローマで八女和紙紙漉きの実演が可能となり、八女和紙、久留米絣それぞれの制作者が現地で実演することができた。また、博物館コーディネーターのイヴァーノ・フランカヴィラ氏には、イタリア事業全体の企画や展示ブースデザインに、通訳の鶴巻美砂子氏には、イタリア語通訳ならびにDVD字幕作成にご協力を頂いた。部会を代表して、深く感謝申し上げます。

報告会

第1回報告会(2018年6月2日)久留米大学御井学舎学生会館ミーティングルーム3

第2回報告会(2018年7月7日)八女伝統工芸館

第3回報告会(2018年12月19日)久留米大学御井本館8階スカイラウンジA

2. 公開講座

筑後地方に産する八女和紙、久留米飛白、藍染技術のアピールとその応用成果を紹介

演 題	講 師	開催日	会場
日本の伝統工芸も継承と活用	九州国立博物館 元館長 三輪 嘉六	9月25日(火)	福岡サテライト
筑後の伝統工芸のさまざま	久留米大学文学部 准教授 大庭 卓也	10月2日(火)	
「筑後工芸品月間」福岡大会 参加に向けてー八女提灯	久留米大学文学部 講師 矢毛 達之	10月9日(火)	
伝統工芸と柔軟性ー久留米絣を テーマにした楽曲・映像作成の記録	久留米大学文学部 講師 神本 秀爾	10月16日(火)	
ドイツの伝統工芸を見習う ー筑後の伝統工芸継承のために	久留米大学文学部 准教授 大場 はるか	10月23日(火)	

3. Web サイト構築

URL: <http://kurumebunkazai.jp/>

4. KOUGEI EXPO (2018年11月2日ー4日)

マリンメッセ福岡(福岡市)で開催された伝統的工芸品の全国大会「KOUGEI EXPO」に、本学学生がデザイン制作に関わった八女提灯を展示



(文責 原口 雅浩)

(7) 民事法研究部会

本年度の活動実績は以下のとおり。

日 時：2019年2月14日(木) 14時～16時

場 所：御井本館2631号室

報告者：西原慎治氏（本学法学部）

テーマ：終身定期金について

(文責 石川 真人)

(8) 地域社会経済研究部会

1. 経済学部地域経済社会研究所との共同研究

大学院前期課程社会経済専修コースの勉強会として立ち上げている。研究所においては、大矢野、松下が中心となって活動しており、予算の関係で、経済学部地域経済社会研究所（大矢野、松石、葉山、畠中）との共同研究として行っている。

本年度の特徴はインドネシアの工業化促進のための方策研究について松下や大矢野が、また、マレーシアについては、大矢野や松下を中心として事務的な交流を経て、永田見生学長と一緒にマレーシア・サラワク大学と久留米大学との姉妹校交流協定を3月8日に締結した。この後、サラワク州の総合的な開発計画について共同研究を行うことをサラワク州政府とクチン市との間に締結した。また、大川市とクチン市との交流を促進して、家具産業の現地進出や自然環境の再生問題について共同研究を進めることを提案している。

2. 公開講座の実施

(1) 九州王朝論

古田武彦氏を始祖とする「九州王朝論」を「古田考古学」を受けて、久留米大学公開講座の代表的なシリーズとして開催されている「九州王朝論」は全国的にも有名な久留米大学の公開講座となっている。

特に、古田氏亡き後、文学部の福山裕夫教授を中心とした「九州王朝論—総括シリーズ」と大矢野主催の「九州王朝論」は双璧となっている。

5月～6月は『古事記』と『日本書紀』に登場する歴代天皇についての九州王朝論としての根拠を説明した。

九州王朝論2017	大矢野 栄次	久留米大学経済学部 教授
	場所	久留米大学御井キャンパス51A 教室
神武天皇と九州王朝論	15:00～16:30	5月12日(土)
神功皇后と九州王朝論	15:00～16:30	5月19日(土)
倭の五王と九州王朝論	15:00～16:30	5月26日(土)
聖徳太子と九州王朝論	15:00～16:30	6月16日(土)
天武天皇と九州王朝論	15:00～16:30	6月23日(土)

10月は、民間の古代史研究所として著名な「邪馬台国」研究者である福島雅彦氏と大矢野栄次とのコラボレーションとして邪馬台国とその前後氏としての九州王朝論について展開した。

邪馬台国と九州王朝論		
	場所	久留米大学御井キャンパス51A 教室
神武天皇と九州王朝論（大矢野）	13：00～14：30	10月6日（土）
邪馬台国1（福島雅彦）	13：00～14：30	10月13日（土）
邪馬台国2（福島雅彦）	14：50～16：20	10月13日（土）
神功皇后と九州王朝論（大矢野）	13：00～14：30	10月20日（土）
継体天皇以後の九州王朝論（大矢野）	14：50～16：20	10月20日（土）

（2）大川学

大川市との長年の連携協定により、大川市の歴史・文化・政治・経済についての講演会を地元の研究者との交流を前提に講演を行っている。大川市の川野栄美子さんの「筑後川・有明海の民話」と大川市の鐘ヶ江社中の皆さんの「筑後川・有明海の民謡」は人気がある。また、大矢野の「物流新幹線構想—佐賀空港説」が支持されている。

大川学シリーズ	場所	ふれあいの家
日本の古代史と風浪宮	19：00～20：30	5月8日（火）
三瀧一族と日本の古代史	19：00～20：30	5月15日（火）
筑後川と有明海の民話1	19：00～20：30	5月22日（火）
筑後川と有明海の民話2	19：00～20：30	5月29日（火）
筑後川と有明海と九州の民謡	19：00～20：30	6月5日（火）

（3）「うきは学」（2018年9月に6回）

うきは市との2016年以來の連携協定締結により、うきは市の歴史・文化・政治・経済についての講演会を地元の研究者との交流を前提に行っている。特に、邪馬台国論争の舞台はうきは市であるという田主丸出身の福島雅彦説は人気がある。

うきは学シリーズ	場所	うきは市民センター3階
邪馬台国とうきは市内1	14：00～15：30	9月1日（土）
邪馬台国とうきは市内2	15：40～17：20	9月1日（土）
神武天皇と日本の古代史	14：00～15：30	9月8日（土）
斉明天皇と白村江の戦い	15：40～17：20	9月8日（土）
耳の記憶～筑後川と有明海の民話	14：00～15：30	9月15日（土）
筑後川と有明海と九州の民謡	14：00～15：30	9月22日（土）

3. 佐賀低平地研究会地域創生専門部会との共同開催プロジェクト（大矢野、松下愛）

（1）見学会「佐賀の歴史」日時：平成30年8月27日（月）～28日（火）

場 所：佐賀県内の歴史探索 参 加 者：30名

青森中央学院大学からの「北部九州文化と歴史体験研修旅行」のために参加した研修学生10人と久留米大学の学生10人と一般参加希望者10人を案内して、佐賀県内の吉野ヶ里、佐賀城本丸公園、肥前名護屋城の見学会を開催した。最初に、筑後川の恵みと災害について、青森県の岩木川と比較して、3年に一度の自然災害が貧困をもたらす岩木川と自然の恵みをもたらす筑後川の相違を説明し、自然環境や気候の相違が社会生活にもたらす影響について説明した。

弥生時代の吉野ヶ里の説明においては、縄文時代の三内丸山遺跡とことなっていて、三内丸山遺跡では窺い知れない稲作文化圏の特徴としての村と村の争いという戦争が社会現象として現れることを1つのテーマとして説明した。

肥前名護屋城に関しては、全国の戦国武将が佐賀の一角に突如として出現する歴史の問題に学生は大きな関心を抱いたようである。

また、佐賀城本丸公園においては、幕末の佐賀藩の文化と技術についての説明に参加者は興味を示していた。

(2) 勉強会「筑後川と有明海の環境問題とダム建設」

日 時：平成31年2月20日(水) 10:00～16:30 場 所：甘木・小石原村小石原ダム建設現場
講 師：水資源機構、松下愛、大矢野栄次 参加者：18名

最初に、水資源機構小石原村小石原ダム建事務所において小石原ダムの用途と建設計画についてのレクチャーを受けた後、現場の小石原ダム建設現場を見学して説明を受けた。

大矢野栄次より、有明海の歴史から有明海には多くの人を養う資源が一定量以上あったことを説明されるとしていくつかのモデル例を挙げた。徐福の時代の有明海周辺の人口は2～3万人程度であり、ここに1,500人程度の徐福集団が有明海の家産物と山地の収獲物で生活したことが説明されること。それ以後、景行天皇や倭武尊の熊襲退治においても、同様の分析が可能であることが説明された。具体的には、筑後川の河口域で生まれた鮎が毎年1,500万匹遡上すると仮定するならば、約3億円の補償金が必要になること、これにウナギの遡上をいれるならば、毎年5億円の補償が必要になることが説明された。

4. 物流新幹線構想

- (1) 青森中央学院大学との連携で「物流新幹線構想を蟹田港に」という物流新幹線構想について政策提言を青森県に提出して説明を行っている。
- (2) 佐賀県と長崎県には、「長崎新幹線を物流新幹線構想に」というテーマで政策提言を行っている。毎年定期的、「肥前殖産の会」においても検討している。

5. 海外での政治・経済・文化交流との関係

- (1) インドネシアシンポジウム参加・報告「インドネシアのモノづくりと流通経済との関係について」(8月)
- (2) マレーシア・サラワク州における開発計画の提言、「河川管理と潮位差発電の可能性について」(10月)、「林業地の再生と植林計画」(10月)、「ゴム園建設の可能性について」(3月)、「看護師

さんの再教育問題と日本への就職の可能性について」(3月)など。

- (3) エジプト・カイロ大学において、「幕末・明治維新の日本の歴史の本質」・「話し言葉と書き言葉の相違がもたらす文化・政治への問題」

6. 発行冊子

- (1) 「佐賀県人が知らない佐賀県人」、佐賀低地研究会・久留米大学比較文化研究所、3月
(2) 「記紀九州第4巻発行」、五弦社、2018年4月
(3) 「経済政策の考え方」、創生社、2019年3月

(文責 大矢野 栄次)

(9) 地域精神保健福祉研究部会

以下、実施した3つの調査研究について報告する。

1. 小学生のQOLの変化に関する研究 ―夏休み中の学習支援の事例より―

1-1. 目的

本研究では、子どもの心理的状态などが不安定になりやすいとされる8月下旬頃の時期に、小学生を対象にした夏休み中の学習会(夏休み宿題大作戦)を対象に子どものQOLを高める取り組みとしての観点から検討を行った。筆者らが2015年の夏休み中に行った研究(辻丸・池田ら 2016)を比較対象とし、勉強を教える大学生の「教育能力」といった視点を考慮し、子どもの精神疾患等に関わりがあるとされる「自尊感情」を含めたQOLを高める方法について分析することを目的とした。

1-2. 日時・場所・対象者・方法

日時：2018年8月16、17日

場所：福岡県久留米市金丸小学校コミュニティーセンター

対象：金丸小学校4～6年生の計28人

方法：学習会の実施前後に質問紙による集合調査

1-3. 結果

本研究の成果を「比較文化研究」第54輯に投稿。

2018年の学習会の実施後(平均値)は実施前(平均値)と比べて、「QOL総得点」は9.4点上昇、「精神的健康」は8.7点上昇、「自尊感情」は9.9点上昇、「友達」は18.7点上昇し、有意差が確認された(Wilcoxonの符号付順位検定 $P < 0.01$)。2018年の学習会に参加した大学生の中学生に対して約半年以上の教育指導を行った経験が、学習会に参加した小学生の「自尊感情」を含めたQOLを高める大きな要因の一つになった。

1-4. 結果

本研究の成果を「比較文化研究」第54輯に投稿。

2. 中学生のQOLと問題行動特性に関する研究 ―中学生の学習教室の事例より―

2-1. 目的

本研究は、中学生のQOLの変化が問題行動特性（SDQ）に及ぼす影響について、時系列分析を行うことを目的とした。

2-2. 日時・場所・対象者・方法

日時：2018年10月～2019年3月

場所：学習教室が実施されている大曲公民館及びケアハウスメゾンマリア（久留米市）

対象：学習教室に通う公立中学1～2年生（3年生）の約14人

方法：1ヶ月に1回の質問紙法による集合調査（縦断調査）

2-3. 調査票の回収状況

2018年10月：中学1年生7人、2年生4人、3年生2人、計13人

2018年11月：中学1年生5人、2年生3人、計8人

2018年12月：中学1年生10人、2年生4人、計14人

2019年1月：中学1年生8人、2年生3人、計11人

2019年2月：中学1年生9人、2年生4人、計13人

2019年3月：中学1年生10人、2年生4人、計14人

※学習教室の欠席などにより標本数が14人を下回っている時がある

3. 主任児童委員による子ども・子育て支援、及び児童虐待の要因等に関する事例分析

3-1. 目的

子どもや子育て家庭を取り巻く課題が多様化、深刻化している今日、尊い命が失われるような事件が絶えず報道されている。本研究では、地域の実情に通じた主任児童委員の方々に対する児童虐待などに関する事例について聞き取り調査を実施し、子どもの状態（発達障害の有無など）や家庭状況（養育者の精神疾患や貧困など）と児童虐待との関連性、主任児童委員による子ども・子育て支援方法などのデータを得ることを目的とした。

3-2. 日時・場所・対象者・方法

日時：2018年4月～9月（2016年からの継続）

場所：主任児童委員に活動する担当学区の小学校やコミュニティーセンターなど

対象：久留米市で活動する主任児童委員5名

事例：主任児童委員が介入した児童虐待などに関する10事例のデータを収集

方法：半構造化面接

3-3. 成果

学会発表：池田博章、大西良、辻丸秀策「主任児童委員による子ども・子育て支援の有効性に関する

る一考察：エコマップを用いた事例分析より」、日本子ども虐待防止学会第24回学術集会おかやま大会、2018年12月1日

(文責 辻丸 秀策)

(10) 心理教育研究部会

部会員と分担

木藤恒夫（統括、企画3）	園田直子（企画1）	津田 彰（企画2）
原口雅浩（企画2）	日高三喜夫（企画3）	徳田智代（企画1）
安永 悟（企画1）	山本眞利子（企画3）	

2018年度の3つの活動は次の3つの企画であった。

- 企画1 第6回協同教育フェスタ
- 企画2 久留米国際セミナー2018
- 企画3 実践的な心理臨床家の育成（研修会）

<企画1 第6回協同教育フェスタ（責任者：安永）>

主旨（目的）

「自由と平等と福祉の原理に基づき、すべての人が“平和で幸せに暮らせる社会”」すなわち人間尊重社会の実現をめざして、協同教育（学習）を基盤とした協同文化の育成と定着を目的に、年一回、「協同教育フェスタ」と銘打った活動を継続している。2018年度は第6回目の開催となった。

日時 2018年7月21日（土） 10:00-17:00

会場 久留米大学御井学生会館 ミーティングルーム3

プログラム

- 1 挨拶・導入 安永 悟（久留米大学）
- 2 実践研究1 清藤弥希（福岡県立輝翔館中等教育学校）
「化学的な見方や考え方を育てる『化学基礎』学習指導
—『シンク・ペア・シェア』を取り入れた単元構成を通して—」
- 3 実践研究2 石山信幸（久留米市立南筑高等学校）
「協同学習による評価の始め方 —高校数学の授業作りを通して—」
- 4 理論研究 原田信之（名古屋市立大学）
「子どもの学習に何が最も効果的か
—ジョン・ハッティの学習者を生かす教育のエビデンス—」
- 5 協同教育カフェ（全体交流）
- 6 事務連絡・閉会

＜企画2 久留米国際セミナー2018（責任者：津田）＞

主旨（目的）

本セミナーは「ストレスと健康、ウェルビーイング」に関する最近の研究の進展と実践活動について、心理学をはじめとする健康科学領域における報告と議論を行うことを目的とする。2012年から毎年行っているセミナーで、今回6回目となる。学内の学生だけでなく卒業生や社会人にも広く参加を呼びかけ、地域への貢献を目指している。

日時 2018年12月7日（木）13：20－16：30

会場 久留米大学御井学生会館 ミーティングルーム3

プログラム

挨拶 津田 彰（久留米大学文学部）

講演第1部 渡辺 貢（渡辺オイスター研究所）

「マガキより発見された新規抗酸化物質 DHMBA のストレス緩和作用について」

講演第2部 渡辺 貢

「マガキより発見・同定された新規抗酸化物質 DHMBA の代表的な機能性の一つであるストレス緩和作用を動物試験とヒト試験にて実証した研究について」

質疑応答

＜企画3 実践的な心理臨床家の育成（研修会）（責任者：木藤）＞

主旨（目的）

心理学系出身者が臨床心理家として実際の現場で活躍するためには、「公認心理師」や「臨床心理士」をはじめとする資格をもつことが大きな要件になっており、臨床家としての仕事を理解しておくことが肝要である。本企画では、本研究科出身の公認心理師・臨床心理士を講師として、両資格の資格試験ならびに役割や仕事についての研修会を実施した。

日時 2019年3月16日（土）10：00－12：00 13：00－15：00

会場 久留米大学御井キャンパス 1000号館7F 研究科長室

プログラム

10：00－12：00 天満 翔（富田病院、公認心理師・臨床心理士）

「公認心理師の試験と役割・仕事について」

13：00－15：00 天満 翔（富田病院、公認心理師・臨床心理士）

「臨床心理士の試験と役割・仕事について」

（文責 木藤 恒夫）

(1) 会計専門職研究部会

(1) 研究目的

会計専門職研究部会は、会計専門職（公認会計士・税理士）の実態と制度に関する研究を目的としている。

主な研究対象として、大手3大監査法人、EY 新日本有限責任監査法人、有限責任監査法人トーマツ、有限責任あずさ監査法人を取り上げ、福岡オフィスへの訪問、本学学生を引率しての体験学習の実施、シニアマネジャーやパートナーなど幹部クラスの公認会計士との意見交換等を行なっている。

また、九州北部税理士会との関係強化を図り、租税教育推進部委員としての税理士との意見交換や実態調査を行なっている。

(2) 2018年度の活動内容

①日本公認会計士協会北部九州会による講演会の企画・実施（通算、7回実施）

2018年6月26日（火）：久留米大学御井学舎

内容：制度説明会・職業紹介（担当者説明・パンフレット配付等）、ビデオ教材、合格体験談、質疑応答、アンケート記入、等

協会講演者：日本公認会計士協会 北部九州会 渉外広報委員

渉外広報副委員長 吉田 知生氏（EY 新日本有限責任監査法人）、等

②日本公認会計士協会北部九州会による中学生向け講座の実施

2018年7月22日（日）：久留米大学御井学舎

内容：中学生向けハロー会計（担当者説明、DVD教材、会計グッズ配付、等）

協会講座担当者：日本公認会計士協会 北部九州会 渉外広報委員

渉外広報副委員長 吉田 知生氏（EY 新日本有限責任監査法人）、等

③九州北部税理士会による中学生向け講座の実施

2018年7月22日（日）：久留米大学御井学舎

内容：中学生向け租税教室（担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等）

協会講座担当者：九州北部税理士会 租税教育推進部委員

中村 和洋氏（税理士）

④監査法人への体験学習プログラムの実施

2018年9月11日（火）：有限責任あずさ監査法人（福岡オフィス）

対応公認会計士：大塚 隆一氏（シニアマネジャー）

貞光 貴明氏（アシスタントマネジャー）

樋口 洸太氏

寺嶋 翔士氏

内容：本学学生の体験学習（担当者説明、DVD教材、オフィス内見学、経営分析の事例研究、

公認会計士試験合格者による体験談、質疑応答、アンケート記入、等)

2018年9月14日(金): トーマツ有限責任監査法人(福岡オフィス)

対応公認会計士: 高尾 圭輔氏(パートナー)

阿部 万喜子氏

中隈 晃氏

大和 信仁氏

馬場 あずさ氏

内容: 本学学生の体験学習(担当者説明、DVD教材、オフィス内見学、経営分析の事例研究、
公認会計士試験合格者による体験談、質疑応答、アンケート記入、等)

⑤第43回西日本高等学校簿記競技大会 参加校教員(21名)への説明

2018年11月3日(日): 久留米大学御井学舎

内容: 簿記会計教育の現状、久留米大学での会計専門職教育への取り組み、等

⑥九州北部税理士会租税教育推進部による租税教室の実施

2018年11月7日(水): 久留米大学御井学舎(通算、4回実施)

内容: 大学生向け租税教室(担当者説明、教材配布・パワーポイント使用、等)

協会講座担当者: 九州北部税理士会 租税教育推進部委員

中村 和洋氏(税理士)

⑦経済産業省九州経済産業局による講演の実施

2018年11月20日(火): 久留米大学御井学舎

担当者: 総務企画部総務課 総括係長 真木 農氏

調査官 原 朋子氏

内容: 統計資料等に基づく九州の産業・ビジネスの紹介、等

⑧財務省福岡財務支局による講演の実施(通算、5回実施)

2018年12月3日(月): 久留米大学御井学舎

担当者: 財務省福岡財務支局 理財部長 田村 嘉啓氏

財務広報相談室 室長補佐 柳原 栄氏

内容: 大学生向け講演(担当者説明、教材配布、等)

(北部九州地域の産業・景気動向・統計資料等、財務省調査より)

⑨日本政策金融公庫による講演会の実施

2019年1月7日(月): 久留米大学御井学舎

担当者: 日本政策金融公庫 国民事業部 福岡創業支援センター所長 宮本 大資氏

内容：大学生向け講座（担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等）

テーマ：ビジネスプラン作成講座

⑩日本公認会計士協会北部九州会主催、「新春のつどい」への来賓出席

2019年1月11日(金)：西鉄グランドホテル（政界、財界、官界、各種団体・協会出席）

2018/09/11 有限責任あずさ監査法人での体験学習



2018/09/14

有限責任監査法人トーマツでの体験学習



2018/11/03 西日本高等簿記競技大会の引率教員に対するレクチャーと商業教育についての意見交換会



(文責 杉野 博貴)

(12) 日本アジア比較文化研究部会

1. エジプト・カイロ大学文学部日本研究センター国際シンポジウム「明治以降の日本の経験から学ぶ—明治150周年を迎えて」への参加

昨年に引き続き、本学の学術交流協定校であるカイロ大学日本研究センターの国際シンポジウムに参加し、研究発表を以下のように実施した。

会期：9月22日～23日

会場：カイロ大学

研究発表は、文化、教育、産業革命と国際関係の3セッションに分けて実施され、久留米大学からは「文化セッション」において、次の発表を行った。

- (1) 「“神楽”における“龍蔵”ステップと東南アジア舞踊との比較研究」(福山裕夫)
- (2) 「日本人大学生における外来語の親密度および外来語意識について」(河内千栄子)
- (3) 話し言葉と書き言葉の相違による文化比較の一考察(大矢野栄次)
- (4) 日本・アメリカを“異化”する沖縄の近現代文学(浦田義和)

なお、文化セッションの司会は、元久留米大学国際交流センター長長澤澄子氏が務めた。

2. 公開講演会

日本在住数十年のエジプト文化人であるイブラヒム・サムニー氏をお招きし、外国人在住者としての苦労話を講演していただいた。

期 日：10月27日

会 場：久留米大学

テーマ：「外人はつらいよ」

氏は、元エジプトプロサッカー選手だが、けがにより、父が日本の大学でアラビア語を教えていた関係で、日本の沖縄で仕事に就き、傍ら沖縄で少年サッカーチームのコーチをしながら、沖縄国際大学で「イスラム文化」を教えている。講演では、日本のプロサッカーチームの選手であった自らの息子のつらい体験を紹介するとともに、例えば何十年も住んで自らは沖縄人のつもりでいたのに、米軍基地反対のデモへの参加を断られた自分の体験などを話した。





(文責 浦田 義和)

(13) 歴史科学研究部会

2018年度、歴史科学部会については、以下の研究発表、ワークショップ、公開講座を行った。中でも、久留米大学とカイロ大学の協定によるエジプトで行われた講演会において、九州地方の歴史民俗学特性を海外に示せたことは大きかった。さらに、ワークショップ等における共同研究者の出版が行われたこと、平和と言う新元号の源ともなった太宰府地区において、史跡保存の動きに参加できたことと、従来より我々が関心を寄せてきた「太宰府の年代論」、九州王朝論を中心とした北部九州地区へ

の古代史ファンへのアピールとなり、例年通り公開講座、及びワークショップはそれぞれが100名前後の参加者となった。

1) 比較文化研究所主催による講演会、ワークショップ

平成30年10月14日(日) 久留米大学御井キャンパス 500号館 502 13:00-17:00

発見された倭京—太宰府都城と官道 司会 福山裕夫

『九州王朝の新証言→見世音寺の百済系瓦と太宰府の鬼瓦』 古賀達也

—太宰府観世音寺の創建年代の真実に迫る—

「偉弥呼と『倭国大乱』の真相」 正木裕

—古田史学の原点に戻って、古代の東アジアと倭国を僻献すると—

質疑応答の中では、福岡県筑紫野市の前畑遺跡に関する保存運動家より、大宰府を20kmに及んで取り囲む一定の形式が証明された筑紫土塁に関しての議論が闊達であった。大宰府の年代について、古墳時代がどうしても抜けてしまい「老司式瓦の年代」や条里制が数代にわたってしまい観世音寺の創建前に旧条里があったのではないかなど、話題に尽きないワークショップであった。

2) 久留米大学—カイロ大学 学術協定ワークショップ

平成30年9月22-23日 Hall 5Th Central Library Cairo Univ.

“Luzo” Steps in Kagura pefomence in Japan

Characterization relationship to the southern-east asian island

Abstract: Shugendo, the tradition of beliefs and practices in Japanese mountains, had been banned in 1873, Meiji Restoration. The yamabushi, an ascetic sect of itinerant priests, first appeared in the Nara period (AD710-794). Combining a mix of spiritual practices based on Buddhism, Taoism and Ko-Shinto, these mountain ascetics established the religion Shugendo, in the Heian period (AD794-1185). Ko-Shinto is the original animism of Jomon period Japan before the modern Shinto. Kagura is a form of music and dance dedicated to Shinto, Buddhist. The performers of Kagura dance were the yamabushi, practitioners of shugendo, who lived in mountains and provided religious services such as healings and blessings to local communities, and the miko, female shamans who were generally associated with Shinto shrines. Yamabushi performed sacred dance that consisted of theatrical elements. Miko performed ritualistic dances called miko mai or miko kagura. These two traditions, although quite different in performance style, share one commonality: they fall into the category of shamanistic or ecstatic expression.

After ban for Shugendo, the usual people who participate in Kagura changed to farmers and people working for companies in the legions. The Meiji period put a stop to the practice of spirit possession. However, lots of manner, dance, music and other contents of Kagura bring about

the important scents for ancient culture.

TSUGAO Kagura is a Japanese religious dance performance specific to Takachiho Kagra, a district situated deep within the mountains of Miyazaki prefecture, in southern eastern Kyusyu island. The formal origins of Takachiho kagura have been traced to the Edo period (1603-1868). Aso kagura was introduced into SIIBA, Takatiho, northern part of Miyazaki in AD 17th. Aso Kagra are based on Izumo Kagra, these origin of main story were KOJIKI. Possible reason may lie in more older style of religious ceremony in southern-east Kyusyu, before the Aso Kagura. Some scholars made some associate TSUGAO kagura, and other kagura in southern Kyusyu Island, purely with Shugendo, while others believe it has been associated pacific culture, which is largely influenced by Okinawa, or ancient micronesia.

Institute for Cultural anthropology of Kurume Univ. made up the project for Ancient of Kyosyu Island, and some field survey. In this studies, characteristic steps “Luzo” in choreography, and procedure, homologous with culture of southern islands, found in TSUGAO and other Miyazaki area. Background of the presenter is Psychiatrist, we are going to discuss about the trans-cultural syndrome, Fox possession, in this regions.

この発表で、前述の要旨に加えて、南西地方、九州南部、および韓国南西部の海女、巫女（ムーダン）、近世まで憑依（精神医学的トランス）がなされていた神楽（特に荒神舞）とその拍子、ステップについて、相同性の観点から発表した。

3) 共同研究者による出版2018-2019

古代に真実を求めて——発見された倭京—太宰府都城と官道

ISBN-13: 978-4750346496 明石書店

古代に真実を求めて——倭国古伝—姫と英雄（ヒーロー）と神々の古代史

ISBN-13: 978-4750348193 明石書店

4) 日韓“海女、海士”による民間交流

北部九州の神社に、韓国南西部の“海女、海士”が集団で詣でる風習があり、現在でも一部が施行されており、福岡市新宮—福津市においてフィールドワークを行った。

（文責 福山 裕夫）

(14) 筑後川流域圏研究部会

筑後川流域圏研究部会においては、2015年までのプロジェクト研究においては、筑後川流域圏を下流から上流まで、5つの地域に区切り、下流から上流まで2年ごとに研究していくというものであり、2年に1度地域ごとに研究報告書を発行してきたが、2016年度から研究部会として再発足してからは、流域圏の一部または全体について、メンバー各自がテーマ別に研究を行う方式をとるようにしている。

2018年度の比較文化研究所セミナーにおいては、下記のような報告が出された。

浦田義和：北原白秋『天草雅歌』と木下杢太郎『天草組』

河内俊英：九州北部豪雨から学ぶこと

北村修二：循環型社会への対応として再エネルギーを活かした企業・産業・まちづくり

行實鉄平：地方自治体におけるプロスポーツチームの誘致と課題

—「Hawks ベースボールパーク筑後」を事例として—

吉田洋一：頼山陽と九州の儒者たち

各報告内容は、下記①から⑤の通りである。

また、2018年度に、古賀河川図書館の全蔵書の、久留米大学御井図書館への寄贈の申し出を戴いた。教員有志33名の推薦によって、今年2月に御井図書館への受入が決定した。古賀河川図書館は、古賀邦雄氏の蔵書を「古賀河川図書館」として公開しているものである。蔵書数約13,000冊の日本最大級の河川専門図書館として知られているものであり、河川行政・研究者などを中心に、毎月多数の人が訪れている。筑後川流域圏の研究にとっても重要なものであり、2019年度の筑後川流域圏研究部会においても、その活用を考えていきたいと考えている。

(文責 浅見 良露)

① 北原白秋『天草雅歌』と木下杢太郎『天草組』

浦田 義和

2017年度は、柳川出身の北原白秋を取り上げ、その南蛮文学の特質を、「五足の靴」旅行に同行した文学者木下杢太郎の南蛮文学と比較して調査し、杢太郎の詩「黒船」と白秋詩「鵠」の比較を通してまとめた。

2018年度は、それを受けて、現地巡検を通して、両者の天草旅行の結実ともいえるべき『天草雅歌』と『天草組』を比較し、次のように分析した。

『天草組』は、明治40年雑誌『明星』に発表された次の10篇の詩をまとめたものである。

「はためき」「高札」「黒船」「長崎ぶり」「あこがれ」「黒日」「棧留稿」「あまくさ」「巴爾娑摩」「波羅葦増」

「はためき」は、「唐津の殿のいとわかきあえかの姫の髪に塗る伽羅を買ふべく」「渡海船」にはためく旗を歌っている。16世紀末から17世紀初頭の貿易船を背景にし、「姫」と香料を組み合わせ、ロマンチックなイメージを醸し出している。

「高札」は、「窓ごしの夕日の髪の翡翠の香」の「姫君」が「そとうつしては笑みたまふ玻璃のおもても揺るがむに」と、美しい色硝子がまるで揺れたように微笑んだので、その窓の下を通る人は邪魔せぬようにと高札が立てられた、という内容である。

「黒船」には序詞として「事に寄せて自ら嘲る」とあるので「このあまき葡萄の島に、無花果の飲ける丘に、何見ると千里鏡見る。懷疑の北国人は」は、天草にまるで外国から来た黒船のような異郷の人に見えるかもしれないと自分をからかっている。

「長崎ぶり」は「平戸、出島の港ぐさ、たはれ乙女の花言葉。いざ赤き実を吸ひたまへ。口はただれて血をはかむ。牛膽、南星、めるくうる。南無波羅菴増雲善主麿」と、遊郭遊びの危険を、赤い実をつける有毒の薬草名「南星」などをあげながら、天国のイエス様マリヤ様と洒落た詩である。

「あこがれ」は、「天竺」への憧れを歌った詩で「ここよりは白道、直に国つづき、未の方は南蛮よ、諸厄利亜国よ、さてはまた紫羅欄花の窓あかく羅面紆ふるふ阿蘭陀の美し都よ」と、「天竺」を超えて、極楽浄土に続く道を行けば、イギリスが、そしてストックの花に彩られ、弦楽器の響く美しいオランダがある、と歌っている。この詩の後注に『天草四郎』の劇詩のつもり」と述べている。

「黒日」は、後注に「前の詩と同じ心持」とある。「絵蠟燭緑にくゆり、沈金の台ほのあかる。じゃすびすの壺には、君よ、かをれるを、葡萄の酒の。かくてなほ君ゆきますや。まるちりの伴天連の徒に— この風に、この雲空に、今日のはた黒日なるにも。」と、きれいな蠟燭の光が豪華な置台を照らし、碧玉の壺にワインがたっぷりなのに、あなたは伴天連となって殉教するのでしょうか、今日は忌日なのに、と詩っている。

「棧留縞」は「天竺の都に近き聖多黙の炎の砂漠、車より過ち落つる身は焼かれ木乃伊とならめ。それや似る汝が胸かな。さればこそ丸乳おほへるなが衣も血色に渴く赤縞の棧留縞よ」とある。インド原産の赤色の棧留縞の着物を着た遊郭女性の境遇を歌っていると思われる。

「あまくさ」は「天草旅行の間、戯れに吉井勇に与ふ」と序詞にある。「天草高来の民こそは耶蘇の外法を伝へぬれ。港に入れる、やあら、いよ、勇魚追ひこしみやびをは、さみどりの胸いとたたき無花果の島の少女らに、ああら切支丹伴天連の恋の秘法ぞ伝へぬる。」とうたう。天草・島原は切支丹の民である。その天草の少女に、都の男が恋の秘法を伝えようとしている。さてうまく行くだろうか？と同行の吉井勇をからかっている

「巴爾娑摩」は「甲比丹よ、誰ぞ足早き隼人率て、海をば船に陸路をば馬もて急げ。孛露の国へと急げ。その国の一の名香、巴爾娑摩は尸に塗るもその尸敗れずと聞く。日の刻に崩れゆくなるわが若き思いぞ惜しむ。塗らむ、その巴爾娑摩の香を」とうたう。防腐剤でもあるペルー産の甘い香りの樹脂バルサムを若さの情熱を失わないように塗ろうとうたっている。

「波羅菴増」は「いかに、いかに、羅馬人よ、西班牙亜、義太利亚、さては羅馬は定かに見つれ、紅毛も愛でたたへたる阿蘭陀のこの鏤版のこの絵図のいづくにか在る、汝がいふ波羅菴増の国は。」とうたう。ローマ人よ、イスパニア、イタリア、ローマは知っているが、このオランダの地図の何処に天国が書いてあるのか、と問うている。

「黒船」「あまくさ」は天草を、「長崎ぶり」「棧留縞」は遊女を、「はためき」「高札」「巴爾娑摩」「波羅菴増」は異国（南蛮）情趣を、「あこがれ」と「黒日」は切支丹を歌っている。

このように木下杢太郎『天草組』は、長崎・天草の切支丹を絡ませながら、近世異国情趣を歌ったとまとめられる。

これに対し白秋『天草雅歌』は、明治40年『明星』掲載の「角を吹け」「ほのかなる蠟の火に」「艫を抜けよ」「汝にささぐ」「ただ秘めよ」「さならずば」「嗅煙艸」「鵠」「日ごとに」「一炷」及び明治41年『心の華』掲載の「黄金向日葵」の11篇からなる。

「角を吹け」は、「わが佳耦よ、いざともに野にいでて歌はまし、水牛の角を吹け」で始まる、教会を背景にした天草の野山の賛歌である。

「ほのかなる蠟の火に」は「ほのかなる蠟の火に羽をそろへ 鳩のごと歌はまし、はらからよ。」と終わる、天草のこの地に根付いたマリア信仰を寿ぐ歌である。

「艫を抜けよ」も「はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、御堂にははや夕の歌きこえ、蠟の火もともるらし、臚を抜けよ。」と、漁師も艫を上げて夕べの祈りに参加しよう、と歌っている。

「汝にささぐ」は、「女子よ、汝に捧ぐ、ただひとつ。然はあれ、汝も知らむ。このさんた・くるすは」で始まる、美しい十字架を愛しい少女に贈ろう歌っている。

以上は、キリスト教賛美の歌だが、次の2篇は邪宗としてのキリスト教を歌っている。

「ただ秘めよ」は「ただ秘めよ、ただ守れ、斎き死ぬまで、虐げの罪の鞭はさもあらばあれ、ああただ秘めよ、御くるすの愛の徴を。」と歌っている。

「さならずば」は、「ただ秘めよ」とちがって「わが家の、わが家の可愛ゆき鳩を その雛を 汝せちに恋ふとしなれば、いでや子よ、逃れよ、はやも邪宗門外道の教」「いで『ころべ』いざ歌へ、わかうどよ。」と、恋人や現世の快樂が欲しければ信仰を捨てよ、と問いかけた詩である。

「鵠」は「わかうどなゆめ近よりそ、かのゆくは邪宗の鵠」と、白鳥のように魅力ある邪宗の少女に近寄るなと歌っている。

以上の二篇は、逆説的に邪宗の危険な魅力を歌っていると捉えられる。

「嗅煙艸」は嗅煙草を吸う媼が、「日ごとに」は、わかうどの欲望が、「一炷」は香の煙が、「黄金向日葵」は真昼の向日葵がうたわれていた。

李太郎『天草組』が、エキゾチックな長崎・天草の近世南蛮情調を歌い、その特質はエキゾチシズムであるのに対し、白秋『天草雅歌』は、まるで異国のような天草の隠れキリシタンの信仰が歌われ、その特質は官能的である、とまとめられる。

注 詩のテキストは次の通りである。

『木下李太郎全集』第1巻、岩波書店、1981年

『北原白秋集』（日本近代文学大系28）角川書店1970年

② 九州北部豪雨から学ぶこと

河内 俊英

近年の洪水被害の多くは、国土交通省管轄の1級河川ではなく2級河川の氾濫が大部分である。朝倉の洪水も寒水川、赤谷川、小河内川、白木谷川、百目木川のいずれもが2級河川である。ここでの河川の氾濫は、山間地の谷川によって形成された扇状地に造られた集落で起きている。扇状地に氾濫した水害は、一旦水が引いてその後に流木や土砂が一気に流出しているが、これは天然ダムが出来て水が流れてこなくなり、天然ダムが決壊して一気に流出する山津波が起きたのである。

洪水被害と地質

安山岩の川は、川の洪水後元の川幅の2倍に、変成岩では4倍、花崗岩では10倍まで広がっている。最も被害の大きい花崗岩は風化すると真砂土になるが、真砂土地帯での土砂災害被害は、広島でも起きている。広島では1999年、2014年、2018年と連続して起きており、その都度数十人が犠牲になっているのである。もう一つ地質と関連した被災地としては、火山灰に由来する鹿児島などのシラス台地が挙げられる。

洪水被害と植生

植生によって地盤崩壊が起きても広葉樹と針葉樹では流木になった場合で異なった被害になっている。広葉樹の場合形状が複雑で重いために遠くまで流されないために溪畔林の天然更新となって自然林を形成するが、針葉樹の場合は河口まで流される。

これまで緑のダムの視点で、広葉樹林は針葉樹林に比べて補水力が大きく洪水対策として優れていると言われてきた。しかし、土砂崩れには、深層崩壊と表層崩壊があり、表層崩壊でも深さ1メートルまでの根で守れるものと、2～4メートルの根が根底まで届かない場合のあることを考慮して考える必要がある。植林して緑化により保安林で土砂流出を防ぐことは、深さ1メートルまでの崩壊には効果がある。しかし、今回起きた2～4メートルで起こる崩壊では、針葉樹・広葉樹の区別なく崩壊が起きるという事も考慮して、森づくりを考える必要がある。

久留米の内水はん濫に対する対策

内水はん濫とは、大雨により筑後川などの水位が上昇して支川・排水路の流れが悪くなった時や支川・排水路の能力を超える雨が降った時に、雨水が溢れ、道路や宅地などに流れ込むことをいう。

久留米市の被害の発生の状況を見ると以下のようなものである。以下久留米市公表記事によると『本流の筑後川は、市内の雨に加え、上流の山間部などで降った雨が流れ込むため、6日夜に「氾濫危険水位」を超過。支流の水位よりも高くなりました。このままでは、水位の低い支流に筑後川から大量の水が逆流し、大規模な氾濫につながるため、河川法に基づいて各支流の河口にある水門を閉鎖しました。水門を閉じて支流の水を筑後川に流せるように、ポンプを作動させます。しかし、今回の雨は2日間で7月の平均降水量を上回り、ポンプの能力を超えたため、内水氾濫が起きました。経験を今後に生かすため、国や県と協力し、内水氾濫が起こった状況を検証します。その上で、流域の住民の皆さんと水門操作時の情報提供などについて話し合うなど、課題の解決に努めます』と結んでいる。

ポンプの排水能力を大きくすることは簡単ではないようだ。その理由は、10年に1度の洪水対策が通常の対策であり、それを役所が簡単に変えることはないのである。悪い？平等主義があって、ここのだけ特例で能力を高めるという事は難しいのである。久留米市が独自に予算措置して、今以上の排水能力のポンプを設置できれば別であるが、その予算措置は簡単ではないのである。

久留米大学御井キャンパスに近い、浸水被害のあった東合川の状況を見ると以下のようなものである。国道210号線バイパス沿いの高良川に掛かる新高良川橋から筑水高校までにある店舗は、毎年梅雨時期に洪水の危険にさらされる。しかし一部の店舗を除いて、これまでは浸水被害までは起きなかった。この国道210号バイパスの多くは、元々水田や農耕地だったところである。この地域に古くから住んでいる地元の方々の家の多くは、嵩上げされた土地に家を建てており、今回の浸水被害も受けていない。また新しい店舗でも、ゆめタウン久留米は、周辺の店舗で浸水被害があった2018年7月6日・7日も営業していたのである。その理由は、ゆめタウンでは、浸水地帯であることを認識し、嵩上げしてそれなりに対策したことで被害をまぬかれたのである。

合川・東合川周辺に昔から在住する人々は、揚舟とセットになる避難小屋を準備して洪水に備えていたことが知られている。その名残の揚舟が合川小学校に展示されている。久留米市内でしばしば、洪水被害にあう地域は、国土交通省のハザードマップの浸水地域に該当する場合が少なくない。このことは、住宅建築許可地域としては問題があると思われるが、全国的に多くの地域で自己責任に任さ

れている。よほど水害被害を注意し、ハザードマップも考慮して住宅地を探さないと、「交通の便と買い物の便および価格などを考慮して選定しても」洪水被害の落とし穴にはまりかねないのが現状なのである。

今回の洪水時にバイパス沿いの店舗にいて被害にあった方の声では、7月6日にパチンコ店とTジョイにそれぞれ行っていて洪水にあい、それぞれ数十人が一晩店で過ごして、7日の朝になって自力で水の中を徒歩脱出した人の記事がある。わたしの友人は、6日にゆめタウンに買い物に行っていて、危うく孤立を免れて脱出して帰った話を聞いた。

この洪水で、多くの車が水没被害を受けたと聞く。佐川急便の事務所兼集荷場がゆめタウンの近くにあるが、ここでは、集荷した荷物の水没を回避するために社員総出で預かった荷物を2階に移したが、その間に社員の車を移動させる時間の余裕がなくて、水没したと言う。ゆめタウン駐車場では、周辺の人々に緊急避難の受け入れを申し出たとも聞く。

わたしは7月7日に晴れ間が出たので、210号バイパスの水没を知らずに、御井町から高速インター方向に車で出かけたが、交通規制でUターンした。自宅は御井町であることから、洪水被害はなかったが、耳納山系高良山に近いことから、土砂災害の警報がしばしば出される。一昨年（2017年）の6月下旬から7月の梅雨末期には、「土砂災害の危険が迫っているので避難せよ」との警告が出され、テレビで全国放送されたことから、「お前のところは大丈夫か」と全国各地の友人から電話見舞が届いた。この時の避難勧告は、幸い空振りであったが、避難先の収容人数が避難人数に比べて小さく問題がありそうである。

③ 循環型社会への対応として再生エネルギーを活かした企業・産業・まちづくり 北村 修二

近年グローバルのもと環境問題が地球的規模で展開し、日本でも産業構造の再編にもより製造業を中心に循環型社会に対応した新たな企業や産業づくりが、環境産業化という形で新たな地域づくりとして重要性を強めている。事実近年日本特に九州地域に目立つPM2.5問題等大気汚染、また対馬等日本海沿岸地域の漂着ゴミにみられるように越境問題も展開し、新たな対応が必要である。また世界の環境関連ビジネスの市場規模も、2005年の1.0兆ユーロが2020年には2.2兆ユーロへと拡大すると見積もられたように、環境・エネルギー関連機器・サービス市場も拡大し、市場としても評価せざるを得ず、2010年策定の「新成長戦略」では、わが国で、世界トップレベルの環境技術を活かし、グリーン・イノベーションによる世界一の「環境・エネルギー大国」づくりさえ掲げられた。しかも近年従来からの産業・環境問題への対策に加え、2011年の東日本大震災や2016年の熊本地震、ブラックアウト（北海道内全域停電）を発生させた2018年の北海道胆振東部地震をはじめとする災害問題やそれへの対応、例えば東日本大震災に伴って生じた原子力発電の停止とその再稼働、またそれに代替する太陽光発電をはじめとして新エネルギーの展開をめぐることも、それへの対応等そのあり方を含め大きな課題となっている。

北九州、筑後川流域でも、循環型社会を意識した企業や産業への新たな取り組みや企業・産業づくり、地域活性化がみられる。地域で排出される廃棄物の例えばメタン発酵施設の導入やバイオマス化等による廃棄物の処理・利活用化は、福岡県大木町の生ゴミやし尿処理とその有効活用化による循環型農業と地産地消化等リサイクル・資源活用化、鳥栖市の排出・廃棄物処理等の環境産業化によるリサイ

クル・資源化、日田市でのメタンガス発酵施設による排出・廃棄物のリサイクルや再利用化等の事例があげられる。

事実日田市では、環境への新たな取り組みとしての小規模水力発電の他、新エネルギーの利活用、例えば日田ウッドパワー（発電出力1.2万 kW）、フォレストエナジー日田によるバイオ燃料ペレット生産、JEN 玖珠ウインドファーム1.1万 kW 等バイオマス発電等事業もみられる。また2006年に創設された日田市バイオマス資源化センターでは、全国で比類のない全世帯・全事業所が生ゴミ・食品廃棄物等を個々で分別・排出し、家庭から排出される生ゴミ、養豚業に由来する糞尿、焼酎かす、農村集落の排水汚泥を受け入れメタン発酵処理し、メタンガス等は燃料に、また発電にも有効利用される。

また大木町は2008年に「もったいない宣言」をし、2006年に生ゴミを分別収集し、し尿とともに、おおき循環センター「くるるん」で液肥（他にもメタンガスによる発電機用燃料や廃食用油精製による生ゴミ収集車のバイオ燃料）も生産し、減農薬栽培を展開し、米「環のめぐみ」、イチゴ、シメジ、グリーンアスパラ、菜種油「環のかおり」等農産物を生産する循環型農業やエネルギー利用等地産地消の「環のまち」づくりを掲げ、町民の協力のもとに、2011年度以降紙おむつの分別リサイクル、ガラス、プラスチック、家電等25品目の分別回収化にもより、ゴミの削減とリサイクル化に努め、資源循環型まちづくりを推進し、道の駅おおきでは農産物直売所と地産地消型レストランも展開している。

また大牟田市では、エネルギー資源の活用による産業や地域活性化が、企業や資本、自治体や政府により率先的積極的に推進され、近年もエコタウンや太陽光発電等エネルギー産業や環境都市づくり等環境政策や地域政策が展開されたモデル地区である。事実九州、福岡県、なかでも大牟田市等での太陽光発電の急増とその展開は、例えば日照時間等自然や環境条件はもちろん、産業や社会状況等社会条件、なかでも環境政策、特に近年の FIT 制度の導入等政策との絡みで展開してきた。特に太陽光発電の展開は、大牟田市の産業構造の変容やその活性・振興政策等地域や環境政策に大きく関わるものである。

事実大牟田市の振興は、九州の中央部に位置し有明地域の中心的機能を担う人口が14万人の都市として、この地が培い展開し蓄積してきたポテンシャル、特に地域資源、工業系および公害防止等技術や人材を活かす形で、地域活性化を図る地域環境政策、なかでも1998年に全国で5番目のエコタウンづくりやそれに続く次世代エネルギーパークづくりが果たした役割には大きなものがある。時代、社会、地域的要請のもと、環境リサイクル産業によるまちづくりを行うため、まちの未来図を描く「大牟田エコタウンプラン」を掲げ、選炭場や貯木場であった広大な臨海部の低位もしくは未利用地等を、大牟田市健老町・新開町地区を中心に、都市等からの一般および産業用廃棄物、また有用金属のリサイクル産業団地化、なかでもわが国で一般廃棄物ごみ（福岡および熊本県下19市町村の家庭等から回収）を固形燃料化する最初で最大規模の施設である大牟田・荒尾 RDF センターや大牟田リサイクル発電（総事業費105億円で建設され発電能力2.06万 kw の RDF を焼却・発電する施設）、大牟田リサイクルプラザ（事業費37億円で2003年に稼働し家庭から排出される粗大ゴミや不燃ゴミを破碎・選別、また資源回収した空カン、空ビン、紙類、ペットボトル、鉄くず、アルミくず等から資源を選別・回収・梱包・再資源化する）、大牟田市エコサークセンターの4施設等 RDF 化および発電（九州電力に単価は約8円/kwh で売電（約18.5億円））化事業等をその中核として、地域の振興・活性化が図られた。

ここでは、起爆剤とされたエコタウンにさえ近年みられる企業や産業の衰退・撤退化と未利用地化

やその拡大のもと、次世代エネルギーパークづくりによる土地、特に未利用地の活用化によるさらなる開発がみられ、大牟田エコタウン地域に、再生エネルギー施設等が、大牟田市次世代エネルギーパーク企業等として導入され展開している。タマホーム有明メガソーラー発電所（1.67万kW）、九州新エネルギー機構シグマパワー有明三川発電所（4.75万kW）等太陽光発電や新エネルギー発電等はこれに当たる。それは、特に他地域の大規模な企業や資本による展開とそれに益するものには大きなものがあった。

以上のように太陽発電等新エネルギーや企業・産業・地域の活性化は、電力の新規参入等規制緩和や自由化、例えばFIT制度等の環境政策や地域政策、また企業の遊休地・未利用地の利活用化にみられるよう企業や資本とその地域状況やそれへ対応等、企業、地域、国の産業や地域等まさに環境や地域政策との関わり状況そのものを示す。とはいえ人口減少やゴミ袋の有料化等によるゴミの減量、原料となるRDFの減少、ゴミの広域的回収、施設の老朽化と修繕・新設等経費や経営上の、緩和・解消し難い課題から存続・展開が困難化する等の課題もみられる。事実太陽光発電が急増する企業では、資本金や投資規模は大規模で利益も大きい、他地域に本社や管理部門があり、持続的存続、地元への貢献や雇用、リサイクルや地域循環等をはじめ、地域連携や地域内循環への志向は、メガソーラー大牟田発電所等に、また九州電力の下請け企業にみられるよう低位で課題である。

④ 地方自治体におけるプロスポーツチームの誘致と課題

—「Hawks ベースボールパーク筑後」を事例として—

行實 鉄平

【研究の目的】

プロスポーツチームの誘致が地方自治体にもたらす経済的・文化的な効果や課題を展望するため、「Hawks ベースボールパーク筑後」（ボールパーク筑後）を対象とし、2017年度は、球団および筑後市へのヒアリング調査を実施した結果、誘致（H25～27）から開業2年目（H28～29）までの主な経緯を明らかにすることができた。そこで、2018年度は、同施設の開業後3年間（H28～30）の地域包括連携協定に基づく球団と自治体との連携事業およびファーム観戦者の動向を把握することで、ボールパーク筑後の誘致後の活用状況を明らかにしていくことを目的とした。

【調査方法】

1. 文献調査

球団や筑後市の公式HPで公開されているボールパーク筑後に関する情報を収集するとともに、ボールパーク筑後への視察、球団関係者や筑後市担当課への調査の際に資料提供の依頼を合わせて行うことで、より多くの関連資料の収集に努めた。

2. ヒアリング調査

地域包括提携に基づく実施事業およびファーム観戦者の状況等について内容を正確に把握する為、球団および筑後市担当課へのヒアリング調査を行った。

＜球団関係者へのヒアリング調査＞

▶調査日時：平成30年5月14日（月）10：00～12：00

▶対象者：岩尾 文博氏（筑後事業推進部部長補佐事業運営担当）

山坂 彩氏（筑後事業推進部兼スポーツ振興部企画・運営課）

＜筑後市担当課へのヒアリング調査＞

▶調査日時：平成30年7月19日(木) 10:00～12:00、11月1日(木) 15:30～17:30

▶対象者：出口 修氏（筑後市ホークスファーム連携推進室 担当係長）

串田 杏依氏（筑後市ホークスファーム連携推進室）

【地域包括連携に基づく事業の内容】

平成28年は、3月19日にボールパーク筑後が開業したのを皮切りに、手探り状態ではあるが多くの事業を実施しており、それらを集約すれば、主に3つの事業内容に整理することができる。具体的には、まず、①「スポーツ振興及び健康増進に関する事業」として、筑後市長旗争奪少年野球大会、選手による野球教室の開催、小学校・幼稚園（保育園）巡回スポーツ教室、ちっこスポーツフェスティバル、健康と食育の祭典 with 環境フェスタなどが挙げられる。次に、②「青少年の教育及び育成に関する事業」として、ファンサービスへの市民参加、小学校・特別支援学校への選手訪問などが挙げられる。最後に、③「観光振興に関する事業」として、土日祝日の試合開催日にボールパークにて市内の特産品を販売する物産展の開催などが挙げられる。

平成29年は、昨年度の実績を踏まえ、さらなる事業内容や事業カテゴリーの拡大がみられ、それらを集約すれば、主に5つの事業内容に整理することができる。昨年度から追加された事業としては、①「スポーツ振興および健康増進に関する事業」では、ホークス Jr チーム対筑後市選抜チームの試合、市主催イベントへの選手等の派遣が挙げられる。②「青少年の教育及び育成に関する事業」では、恋のくに筑後市デーの開催、選手やOB等による学校訪問が挙げられる。③「観光振興に関する事業」では、タマスタ筑後開業1周年記念イベントが挙げられる。また、新たな事業カテゴリーとしては、④「地域活性化に関する事業」として、野球観戦招待券および優待事業、市内の小中学校、幼稚園（保育園）を対象とした球場見学、市主催イベント等への球団協賛、市民ボランティアの結成、「広報ちくご」でのスタッフ募集、若鷹寮に入寮する選手の転入イベント、近隣大学の学生による試合運営サポートなどが挙げられる。さらに、⑤「相互の情報発信に関する事業」として、キャラクターや選手を活用した広報活動の推進などが挙げられる。

平成30年は、追加した事業もみられるが、むしろ、これまでの事業を継続していることが伺えた。その主な事業内容は、平成29年度と同様に5つのカテゴリーに整理できる。平成28・29年度から、さらに追加された事業としては、まず、①「スポーツ振興および健康増進に関する事業」では、ジュニアスポーツチャレンジ、火の用心グランドゴルフ大会、筑後ファーム野球教室、筑後七国中学生野球教室、ホークス選手歓迎のつどいなどが挙げられる。次に、②「青少年の教育及び育成に関する事業」、③「観光振興に関する事業」では、同様の事業が継続されていた。次に、④「地域活性化に関する事業」では、文化団体等の発表機会の提供、⑤「相互の情報発信に関する事業」では、ふるさと納税返礼品にタマスタ筑後での始球式プラン創設などが追加事業として挙げられる。

【ファーム観戦者の動向】

平成28年シーズンは、2軍戦55試合が行われた。ファーム観戦者は、2軍戦116,643人（平均2,121人）がボールパーク筑後に来場している。また、土日平均は、2,756人であり、平日平均1,629人よりも多くの来場を得ている。さらに、本シーズンは、13回の満員を記録している。

平成29年シーズンは、2軍戦58試合が行われた。ファーム観戦者は、2軍戦118,874人（平均2,050人）

がボールパーク筑後に来場している。また、土日平均は、2,725人であり、平日平均1,666人よりも多くの来場を得ている。さらに、本シーズンは、13回の満員を記録している。

平成30年シーズンは、2軍戦53試合が行われた。ファーム観戦者は、2軍戦106,041人（平均2,001人）がボールパーク筑後に来場している。また、土日平均は、2,544人であり、平日平均1,585人よりも多くの来場を得ている。さらに、本シーズンは、6回の満員を記録している。

【まとめ】

本年度は、ボールパーク筑後の誘致後（平成28～30年度）の活用状況を明らかにする為、具体的には、地域包括提携に基づく球団と自治体との連携事業内容およびファーム観戦者来場動向を各種調査により把握することを目指した。その結果、まず、地域包括提携に基づく事業は、事業数および事業内容カテゴリーの拡大を確認することができた。次に、2軍戦の観戦者の動向は、平成28～29年度にかけて来場者数は増加しているが、一方で、1試合当たりの平均観戦者数は、平成28年度2,121人⇒平成29年度2,050人⇒平成30年度2,001人と減少していることが確認できた。このように、様々な事業内容の展開を図っているにもかかわらずファーム観戦者が減少していることから、今後、各事業の質的向上は残された喫緊の課題であるといえよう。

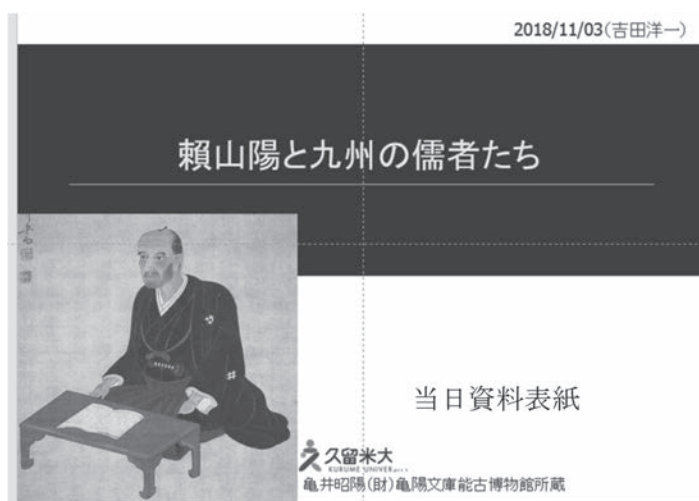
⑤ 頼山陽と九州の儒者たち

吉田 洋一

「耶馬溪」誕生！200年記念祭「頼山陽フォーラム」への参加（2018.11.03、於 耶馬溪公民館・文化ホール）

「頼山陽と九州の儒者たち」講演資料抄録

広島出身の漢学者で、幕末の志士に影響を与えた頼山陽（1781～1832）は、文政元（1818）年に九州を遊学し、その際「耶馬溪」と命名した。このことを端緒とし、当地で記念式典とフォーラムが開催された。報告者は、耶馬溪入溪前の山陽の行動について、福岡の儒学者亀井昭陽（1773～1836）との交友を中心に講演した。



（スライド2目次）

はじめに

1. 亀井南冥・昭陽関連年表一省略
2. 南冥・昭陽と山陽
3. 草場佩川と山陽

終わりに

(スライド3)

はじめに 五亀七頼

五亀一亀井南冥、曇栄(弟)、昭陽(長男)、大壮(次男)、大年(三男)→のち、暘洲(孫、昭陽次男)
七頼一頼山陽、春水(父)、春風・杏坪(叔父、三頼)、聿庵(長男)、支峰(次男)、鴨厓(三男、三樹三郎)

●文化8年(1811)草場佩川→亀井昭陽「…当時、芸筑文事相ヒ競フ。五亀七頼ノ名アリ。」

亀井南冥(1743~1814) 一頼春水(1746~1816) 亀井昭陽(1773~1836) 一頼山陽(1781~1832)

(スライド4) 亀井南冥(1743~1814) 事跡一省略

(スライド5) 亀井昭陽(1773~1836) 事跡一省略

(スライド6) 亀井家系図一省略

(スライド7) 2昭陽(・南冥)と山陽

- ・文政元年(1818)四月二十六日、九州に渡り(福岡)、松永子登宅に滞留→(昭陽から子登へ)「…先頃頼子成(山陽)が西遊した。子成は、とかくの噂はあるけれども、当節の奇才である。彼に、筑前に人なしと言わせないで機嫌よく去らせたのは、あなたです。…(『昭陽文集』初編巻一「賀松子登加俸序」)」
- ・この頃、山陽は『日本外史』執筆中、昭陽は『蒙史』草稿が完成
- ・『蒙史』の特徴

①初学者が、漢学を学びながら日本の事情に暗く、日本よりも中国のほうが文明国であるという「蒙」を開こうとした。

②国学者が編集する日本史は、日本を尊ぶあまり、諸儒を排する傾向にある。

③古代の天皇が儒教を現在(当時)まで継承させたのは大盛徳である。

④『大日本史』は参照したが、あえて『書経』を模範とし高度な漢文となった。

(スライド8)⇒(『蒙史』に関して)「広くは普及しない」と山陽は批判

山陽「同元鳳登高望海中道」

松林横截大洋潮

松林横ざまに截る大洋の潮

万疊波間碧一条

万疊の波間碧一条

此景何縁在西僻

この景何に縁って西僻に在るや

直須奴僕命天橋

直須らず奴僕は天橋と命くべし

昭陽「示蒙史上篇於子成、副以一絶」

史才形世是文雄

史才世に形わるればこれ文雄

時勢人情皆不同

時勢人情皆同じからず

君見竜門刪二典

君見よ竜門の二典を刪りて

徒令古貌古心空

徒らに古貌古心をして空しからしむるを

(スライド9) 頼山陽揮毫(公財・能古博物館所蔵)一省略

(スライド10) 頼春水書簡(安永6・1777年9月)

頼祺一『近世後期朱子学派の研究』(溪水社、1986年)386頁

亀井詩文之評、彼が文ハいやゝゝ面白キ事何分二も伎(イ+養)すくれたる事也、詩文位ノ卑キ様と

ハ甚以アシキ見様也、吾輩よりして藪なとハ達意が主二候へハ位置も自然ト卑ク注解の様ニ成申候、彼ハ高キ所より見降して書キ我ハ秦漢以上の人トシテ書キ候故影ニもセよ何ニもセよ甚以高ク書キ申候、尤叙事ハ達意ニ見え申候、先便脩辞の文ヲ遣候、詩もさ様ニ見え候、意ヲ主トセズ、氣ヲ主トス、此論ハ此頃此方頻ニ申候、此論訓辞ノ初卷に李杜ヲ評して有之候、子琴が所為ハ意ニして氣持ハ氣なり、それゆへ齟齬（ママ）して不宜候、祇園なとハ全ク氣のミ候、藝州ヲあつめて亀井隻手ニ成り不申との論的当ナリ、此頃も碑文ヲ見申候、伯潜もことの外ホメ居申候、何分豪敵々々、…

（スライド11）頼山陽の南冥評 竹谷長二郎『頼山陽書画題跋評釈』（明治書院、1983年）289頁

「書咏史後（咏史の後に書す）」此余十八九時所作、咏史短古一篇。有人傳似南冥先生。先生一讀激賞、貼之壁、毎酒酣輒朗吟稱快。余聞之、感其知己、中心藏之久矣。今茲有西人、索書此、臨書再閱、覺語意有所不足、足數句。恨不起先生質之。襄。（此れ余の十八九の時作りし所の咏史短古一篇なり。人有り伝へて南冥先生に似す。先生一讀激賞し、之を壁に貼り、酒酣なる毎に輒ち朗吟して快と称すと。余之を聞き、其の知己たるに感じ、中心之を蔵すること久し。今茲西人有り、此れを書せんとことを索む。書するに臨み再び閲し、語意の足らざる所有るを覚え、數句を足す。先生を起して之を質さざるを恨む。襄。）

（スライド12～13）3 草場佩川と山陽一省略

（スライド14）おわりに その他の交流など

樺島石梁（1754～1828、久留米・明善堂）、古賀穀堂（1778～1836、精里長男）・侗庵（1788～1847、精里三男）、辛島塩井（1755～1839、熊本・時習館）、月田蒙斎（1807～66、熊本）

頼山陽「鎮西の旅」（江戸詩人選集第八卷『頼山陽 梁川星巖』岩波書店、1990年）

→「壇浦行」、「長碕謡」、「泊天草洋」、「下筑後河」ほか10首収載

【参考資料】『～耶馬溪名付親・頼山陽～「耶馬溪」誕生！200年記念祭記念誌』同実行委員会編、2019年

（参考サイト）中津市HP（<https://www.city-nakatsu.jp/infodoc/2018111200064/>）

(15) イスラーム研究部会

イスラーム研究部会としては、当初在京パキスタン大使のアサド・マジード・ハーン氏を講演者として招聘する予定であったが、直前になり、同氏がアメリカ大使としての辞令が出たため、急遽、代わりの適任者を探すこととなった。その結果、元外交官で日米関係や中東イスラム関係に詳しく、現在日本で活躍中の宮家邦彦氏にお願いすることとした。滞在中のシカゴより当方よりの依頼に快く応じる旨の連絡があり、当方の希望する日時に合わせて九州での講演日程を調整していただいた。その結果、長崎佐世保商工会議所での講演会終了後、直ちに久留米大学での講演を行うということとなり、同会議所での講演後、直ちにタクシーにて高速道路を利用して本大学までお出でいただくこととなった。まさに綱渡りの行程であった。

講演会には約50人程の聴衆が参加された。春休み期間中でもあり、参加学生数は10名前後と少なかった。参加された約20名程の当大学教職員と約20名程の外部の有識者からは、話しの内容が面白くて分かりやすく、興味が深くなった旨の感想が多くきかれた。又、宮家氏のような講演者をこれから

も継続して招聘して欲しい旨の要望が多く聞かれた。

講演内容は外部からの参加者の要求に対応して、テレビなどで同氏が解説される世界情勢や日米関係、中東イスラム関連を中心とするものであった。(講演会の式次第は下記の通り。)

講演会終了後、大学関係者による懇親会を行い、講演内容に関連する事項についての意見交換を行うとともに、当方より久留米大学や久留米市のことについての説明を行い、オピニオンリーダーとしての宮家氏に対しする広報活動にも力を入れた。同氏より久留米大学が多彩な講演会を実施していることを高く評価する旨述べられていた。

極めて限られた予算であるにも拘わらず、同氏のような著名なオピニオンリーダーが同イスラム研究部会での講話を引き受けていただき、積極的に御協力をしていただいたことに感謝を申し上げたい。

講演会式次第

講演会演題：中東とアメリカ ―今後の展望と日本の関わり方

講演者 宮家邦彦 (キャノングローバル戦略研究所研究主幹)

日程 平成31年2月25日(月) 午後5時半～7時

参加者数 51名

場所 御井学舎51B

(文責 古賀 幸久)

(16) 地中海地域研究部会

1 第1回地中海地域観光講演会

平成30年度の地中海地域研究部会(以下、地中海部会と略)の主な活動として、畠中が中心となって「第1回地中海地域観光講演会」を実施した。

当初予定では、スペイン王国アストゥリアス州にあるオビエド大学応用経済学部ホセ・アルバ教授に2018年11月頃来日いただき、「スペインにおけるツーリズムの多様性」、「スペイン国立公園の100年：ピコス・デ・エウロパ国立公園の事例」といったテーマのセミナーを実施予定であった。地中海部会の予算制約や専門性を鑑み、この年度は地中海部会と、経済学部、経済社会研究所、地域連携センター、九州地区スペイン研究友の会、筑後川水問題研究会との共催によって行うことで調整を行った。必要経費については地中海部会、経済社会研究所、教務課予算の3つを合わせることで確保した。

しかしながら、2018年9月になりホセ・アルバ教授から連絡があり、ドクターストップがかかったため残念ながら今回の来日は見送りとなり、再度セミナー担当者の調整から行った。

その結果、新たにガリシア州にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学のサントス＝ソーリャ上級教授にセミナー担当を承諾していただき、2019年1月15・16日の学部・大学院講義を振替して、合計3回のセミナーを行った。その中で後半2回は、公開・半公開セミナーであった。使用言語は英語とスペイン語、畠中が司会・通訳を行った。

その他の役割分担については、地中海部会メンバーはコメンテーター、会場準備、交流会参加を担当し、経済社会研究所、地域連携センター、九州地区スペイン研究友の会、筑後川水問題研究会から

は挨拶と専門が近い分野のコメンテーターを担当いただいた。また、会場の設営、受付、撤収、およびサントス＝ソーリャ教授親子の活動補助については、非常勤講師の篠倉大樹・高木恵両氏と、学部・大学院の畠中ゼミメンバーの協力を得た。

公開・半公開セミナーについては学内外から多数が出席し活発な議論が行われた。受講した学生のコメントも良好で、実際のスペイン人教員による講義体験がポジティブに評価されていた。今後は、今回のセミナーの成果を元に論文などの形で公表していく予定である。

サントス＝ソーリャ教授生の活動記録

1. 1/13日 福岡着

2. 1/14月 久留米大へ移動、巡検

田主丸・うきは巡検

3. 1/15火：セミナー日、表敬訪問

火 2 ゼミ 1

題名：「El turismo en España. Crecimiento y controversias ス페인におけるツーリズム。成長と論争」(仮)

火 4 セミナー 1

題名：「Walking Camino de Santiago. Spiritual Heritage of Pilgrimage サンティアゴ巡礼の道を歩く。巡礼のスピリチュアルな遺産」(仮)

夜 懇親会

4. 1/16水：セミナー日

水 4 セミナー 2

題名：「Parques Nacionales en España: naturaleza, turismo y nación スペインの国立公園：自然、ツーリズム、国家」(仮)
夜 食事会

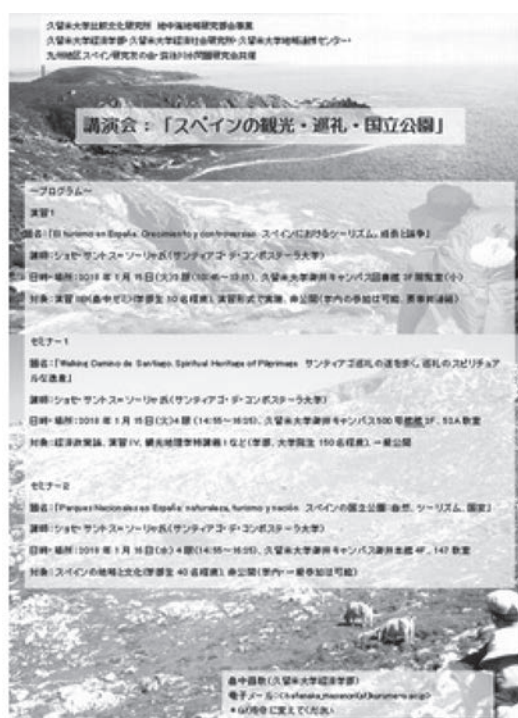
5. 1/17木：熊本県美里町巡検

フットパス視察・体験

6. 1/18金：美里巡検→博多

7. 1/19土

朝 福岡出発



III サントス＝ソーリャ教授プロフィール



ジョセ・サントス＝ソーリャ José Santos Solera 教授はサンティアゴ・デ・コンポステラ大学地理学部の主任教授である。専門領域は人文地理学であり、主な研究対象は世界遺産都市、近郊の農村地帯の発展などである。さらに、歴史的都市や文化遺産巡礼路における観光客の分析にも取り組んできた。サントス＝ソーリャ教授はサンティアゴ・デ・コンポステラ大学地理学研究所 (IGETUR) 所長 (1996-2014) でもあった。

サントス＝ソーリャ教授はアイルランド (University College Cork)、ノルウェー (University of Tromsø)、イギリス (University of Edinburgh)、カナダ (Memorial University of Newfoundland and St. John's)、スペイン (University of Madrid) に教員として勤務したことがある。

サントス＝ソーリャ教授の近年主要業績

"The Camino de Santiago de Compostela: The most important historical pilgrimage way in Europe" (in collaboration with Lois and Taboada). In Olsen, D. & Trono, A. (eds.) *Religious Pilgrimage, Routes and Trails*. Oxb, Oxford, pp. 72-87, 2018

"The location of tourist accommodation in Santiago de Compostela from a client perspective" (in collaboration with Lopez). *Review of Tourism Research (RTTR)*, Vol. 14, No. 5/6, 258-277, 2017

"La construcción turística de los caminos de Santiago de Compostela en España: actores, regards et tradiciones." *Journal Sud-Ouest Européen*, 43, 7-19, 2017

"Tourism and Nation in Galicia (Spain)." (in collaboration with Taboada) *Tourism Management Perspectives*, 22, 98-108, 2017

"The Way of Saint James as an event-politics and nation." *Journal of Policy Research in Tourism, Leisure and Events*, vol. 8 (3) 233-246, 2016

"Tourists and pilgrims on their way to Santiago: Motives, dynamics and final destination" (in collaboration with Rubén C. Lois-González). *Journal of Tourism and Cultural Change*, vol. 13 (2) 2015, pp. 149-164

"New Tourism in the 21st Century (ed.)" (in collaboration with Rubén C. Lois-González and Pilar Taboada de Zúñiga). *Cambridge Scholars*, 2014. And Chapter 3 "New Trends in Urban and Cultural Tourism: The Model of Santiago de Compostela", pp. 209-233

"The Way of Saint James: A Contemporary Geographical Analysis" (in collaboration with Lois, Páez and Páez). In *Brin, S. (ed.) The Changing World Religion Map*, Chapter 35, pp. 709-722, Ed. Springer, 2015.

"Management of Tourist Flows: The Cathedral of Santiago de Compostela" (in collaboration with Peña). *Journal Peace*, vol. 12 (4), pp. 719-735, 2014



サントス＝ソーリャ教授は、久留米大学でのセミナーに加えて、田主丸町・うきは市への日帰り巡検、そして熊本県美里町への1泊2日巡検を行った。田主丸・うきは巡検については久留米大学の地元地域を知っていただくことが目的であり、カップ関連の施設訪問、観光農園でのイチゴ狩り体験などを行った。熊本県美里町への巡検については、美里町フットパス関係者よりサンティアゴ巡礼とフットパスについて視察と意見交換をしてはどうかとの提案があり実現したもので、美里町でのフットパスやフォレストアドベンチャー体験、地元小学校との交流、フットパス研究所での意見交換会など中身の濃い日程であった。巡検に協力いただいた田主丸、うきは、美里町の関係者には心より御礼申し上げます。



2 地中海部会研究会第1回

地中海部会の共同研究の一環として、2018年7月13日、地中海部会研究会第1回を行った。研究会内容は、大場はるか氏による話題提供（研究歴と現在の研究紹介）と、各自の略歴・研究業績交換会を実施し、共同研究を推進するための情報共有を行った。

ザビエル崇敬が日本観に与えた影響

- ・ドイツ語圏南部でザビエル崇敬が強まった
- ・ザビエルとの関係で日本人描写が増えた
- ⇒ ザビエルの後継を育てるイエズス会が日本人描写を「活用」



3 来年度計画

2019年度は、地中海部会メンバーの大場はるか氏が中心となり、「近世ヨーロッパのバロック建築—地中海地域とドイツ語圏との交流—」をテーマとした共同研究・セミナーを実施する方針で計画を提出した。

4 来日中止となったホセ・アルバ教授のフォロー

2019年3月上旬、畠中がオビエド市を訪問し、来日をキャンセルしたホセ・アルバ教授と意見交換を行った。健康問題は解決したとのことで、次の機会があれば是非久留米大で講義したいこと、また久留米との学術交流や共同研究を進めたいとのことであった。

(文責 池口 守)

2. 比較文化研究所 研究員発表会（2018年度）

1) はじめに

2006年度よりスタートした当発表会は、2018年度で第13回目の実施となりました。

2018年度は22名の研究員が当研究所に所属しており、発表会ではその内の17名（後日3名）が発表を行いました。

2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日 時：2019年2月15日（金） 9：20～15：30

②会 場：御井本館6階 166教室（A会場）、167教室（B会場）

③タイムスケジュール

- (1) 9：00～9：20 受付
- (2) 9：20～9：30 開会挨拶
- (3) 9：30～12：40 研究発表
- (4) 12：40～13：30 休憩
- (5) 13：30～17：10 研究発表
- (6) 17：15～17：30 閉会挨拶

④発表形態

1人30分（口頭発表25分 質疑5分）

原則として各グループ毎に座長を交代する

座長、ベル（タイムキーパー）係は基本的に研究員が交代で行う。

3) 平成30年度 比較文化研究所 研究員研究発表会 演題一覧

(166教室 御井本館 6階)

グループ① 9:30～11:00

座長：高木 恵 時間・ベル：藤原 綾子

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-1	9:30～10:00	なぜドイツは脱原発しながら、電力の純輸出国になる	陳 宥蓉
A-2	10:00～10:30	文化と経済の関係研究	阿 思根
A-3	10:30～11:00	久留米藩における物流政策の変化に関する一考察	篠倉 大樹

グループ② 11:10～12:40

座長：篠倉 大樹 時間・ベル：陳 宥蓉

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-4	11:10～11:40	律令期の西国を中心とした35ヶ国における国分寺塔の可視領域一再考一	高木 恵
A-5	11:40～12:10	韓国における環境教育の現状と第2次環境教育総合計画に基づく主な取り組み	藤原 綾子
A-6	12:10～12:40	地方都市中心部を拠点とするローカルアイドルのファンの地域における行動特性	若杉 優貴

グループ③ 13:30～14:30

座長：藤原 綾子 時間・ベル：若杉 優貴

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-7	13:30～14:00	小学生のQOLの変化に関する研究 —夏休み中の学習支援の事例より—	池田 博章
A-8	14:00～14:30	牛島謹爾在米日本人会会長の業績を探る	中畑 義明

(167教室 御井本館6階)

グループ① 9:30～11:00

座長：吉良 晴子 時間・ベル：天満 翔

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-1	9:30～10:00	地域在住の高齢者の来世信念が認知能力に与える影響	今村 義臣
B-2	10:00～10:30	わが国の会計学的暖簾概念に関する一考察 —暖簾の起源（平安末期から室町）—	江口 弘高
B-3	10:30～11:00	在日中国人留学生のメンタルヘルスに関する研究の動向	松田 輝美

グループ② 11:10～12:40

座長：増田奈央子 時間・ベル：赤須 大典

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-4	11:10～11:40	がん患者や小児がん患者やその家族への心理的援助の実践	吉良 晴子
B-5	11:40～12:10	高齢者の自伝的推論を伴う記憶の想起特性	田中 京子
B-6	12:10～12:40	認知症家族介護者のソーシャルサポート希求態度を規定する要因	城戸由香里

グループ③ 13:30～15:00

座長：城戸由香里 時間・ベル：田中 京子

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-7	13:30～14:00	ASD 傾向と情動喚起刺激が注意の解放と馴れに与える影響	増田奈央子
B-8	14:00～14:30	最小条件的要件を備えた現実カテゴリを用いた内集団ひいきの検討	赤須 大典
B-9	14:30～15:00	ASD と AD/HD のロールシャッハ・プロトコルにおける運動反応の違い	天満 翔

3. 日誌（2018年度）

2018年（平成30年）

5月23日（水） 比較文化研究所運営会議

7月18日（水） 比較文化研究所運営会議

11月21日（水） 比較文化研究所運営会議

5月30日（水） 比較文化研究所会議

2018年（平成31年）

1月30日（水） 比較文化研究所会議

※部会活動を除く

活動報告（2019年度）

1. 研究部会報告

(1) 欧州研究部会

欧州部会については、下記の要領で、実施を待つばかりであったが、今般のコロナウィルスの感染予防として、下記に示したシンポジウムについて、比較文化研究所 HP に上げて間もなく、中止の広告を出すに至った。予算の関係から数年前から年1度のシンポジウムの開催にとどまってきた欧州部会であるが、それもやむを得ない事情で遺憾ながら中止となった。来年度にまた同じ要領で実施できればと思っている。

2020年3月16日 文責 児玉 昌己（法学部教授）

久留米大学比較文化研究所欧州部会 EU シンポジウムのご案内【2020年3月25日】

比較文化研究所欧州部会では、昨年に続き、イギリス政治、および EU 経済の著名な研究者2名をお招きし、「EU 離脱後のイギリスと EU はどこに向かうのか」をテーマに、下記の要領で、激動の EU を展望するシンポジウムを開催します。皆さま、お誘いあわせの上、ふるってご参加ください。

共通論題 「EU 離脱後のイギリスと EU その将来」

日 時	2020年(令和2年)3月25日(水) 14:00~16:00
場 所	久留米大学福岡天神サテライト教室 (福岡市中央区天神1-4-2 エルガーラ・オフィス6階)
シンポジウム	報告者 カ久昌幸 (同志社大学法学部教授) イギリスから見る Brexit と英 EU 関係の今後 報告者 田中素香 (東北大学名誉教授、元日本 EU 学会理事長) ドイツから見る EU 離脱と EU の将来 司会とパネラー 児玉昌己 (本学法学部教授) 各35-40分 5分休憩 20分の意見交換
参 加 費	無料
定 員	先着80名 その時点で締め切ります
申し込み	不要 (直接、会場にお越しください。)
問い合わせ	久留米大学福岡サテライト教室 092-7373-1111

(文責 児玉 昌己)

(2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2019年度は、特別企画として久留米大学外国語教育研究所と共催し、「第2回ヒューマンライブラリー @ 久留米大学」を開催した。ヒューマンライブラリーの「本」として12名にお願いした。参加者は本学教員、学生計36名であった。

タイトル：第2回ヒューマンライブラリー@久留米大学

日 時：2019年12月8日 日曜日 13:50～16:00

場 所：久留米大学御井学生会館3F ミーティングルーム3

内 容：ヒューマンライブラリーは人を本になぞらえ、図書館で本を読むように、様々な人と積極的に対話し、理解を深める取り組みである。

ブックリスト

			作者名	本の タイトル	あらすじ
A			がん サバイバー1	生きてるだけで丸儲け	末期がん（肺がん）の告知から12年。「1年ももたないんじゃないか」と家族は言われていたらしい。手術したものの、がんは広がり、脳にも転移。ひとつの抗がん剤がずっと効くわけではないので、次々と新しい抗がん剤を試しながらいのちをつないでいます。病気と向き合う中で、どんなところの持ち方をしてきたかをお伝えできればと思っています。
B			がん サバイバー2	余命告知から13年	家族へ余命1月と伝えられたのは13年前。一時は私も家族も「死」を覚悟しましたが、4度の手術、3度の生命の危機を乗り越え、幸い3年で闘病を終えることができました。信頼できる医師との出会い、家族、友人、そして病気になったことで出会った方たちの支えに今は感謝しております。私の体験が患者さんたちの励ましになればと現在は「がんサロン」でボランティアをしています。今回患者としての不安な気持ちを持ちながら歩んできたサバイバーとしてお話させていただきたいと思っています。

C			(自閉スペクトラムの) 抹茶	割れていた鏡(ミラーニューロン)	私は五十過ぎて自閉スペクトラムだと診断を受け、驚きました。何と私は、現役の知的障害特別支援学校の教員をしていたのです。自分もそうだと知らず。ほんの少し昔まで気味悪がられてました。急速に研究が進む自閉スペクトラム、その鍵はミラーニューロン!? 周りに影響を受けにくい、雑談が苦手、人と笑いのタイミングがずれる、健常の大人から避けられる。そんな私は、自閉の子とウマが合います。健常の教員がその協調性の高さゆえに、車椅子の肢体不自由児をわざわざ雨に濡らす姿もお伝えします。自閉症の特質の一つ、「限定された興味」の例に、二十年来調べ続けた著書「若松軍艦防波堤物語」もご覧ください。
D			エジプト人留学生	エジプト革命	2010年から2012年にかけてアラブ世界において「アラブの春」が発生した。前例にない大規模反政府(民主化要求)デモや抗議活動を主とした騒乱のことである。2010年12月17日にチュニジアで警察官女性に顔を強打され、売り場として使っている車も警察官に強制収用されたモハメッド・ブウアジジと言う人がそのせいで、焼身自殺した事件をきっかけに、反警察・反政府デモがチュニジア国内全土に拡大した。それから、アラブ世界にも波及し、各国にデモが発生した。エジプトの場合は、最初に、国民に対する警察の不正・暴行・蛮行・抑圧行動に対して、警察の日(1月25日)2011年に反警察若者デモが起こった。結局このデモは「怒りの革命」に進化した。結局どんな流れで行ったかという話をお届けしたいと考えています。
E			ボナペティ	STOP! 子どもの食と心の貧困	私たちは、2014年『子どもの貧困対策法』の施行より勉強会を始め、同年6月から現在までに、子どもたちを支える4つの活動を中心に行っています。今年スタートした『ぎおんさんの森食堂』は、地域の高齢者、地元の大学生も参加して子ども達とカレーライスを作って食べています。歩いて行ける距離に子どもたちの居場所がたくさんできて欲しいと願っています。

F			ベトナム人 留学生	ベトナムと 日本	僕が日本に来て6年たちました。日本には経済を 学びたくてやってきました。戦後、日本もベトナム もたいへんでしたが、日本は急速な経済復興を したからです。それを学びたいと思いました。ベ トナムも今急速に経済発展しています。現在のベ トナムの様子とベトナム人が見た日本の様子をお 話してきたらなと思っています。
G			ボランティア	被災地と ボランティア (支援)	あらすじ：ボランティアって例えると「特効薬」。 凄い力を持っている！けれども危険性も有るんだ よ。そんな経験知識を得ながら、地域社会に新た な可能性、ボランティアを浸透させようと奮闘中 の作者の物語。
H			里親	里親支援機関 OHANA	さまざまな理由から自分が生まれた家庭で暮らすこ とのできない子どもたちがいます。OHANAでは、 里子、里親支援を行っています。「ひとりひとりが 大切にされる地域社会を」目指し活動しています。
I			児童養護 施設長さん	子どもが育つ 養育現場から	最近、児童虐待や子どもの貧困などが社会問題と なっています。なんだか遠くのここのような気が しますが、実は私たちの身近で起こっている課題 です。分離保護された子どもが暮らす現場の声を 届けたいと思います。
J			国際協力	好きこそ物の 上手なれ？	これまで、異文化交流、日本語教育、国際協力、 環境教育の分野で様々なボランティア活動を行 なってきました。ベトナムでは自然環境保護のため、 青年海外協力隊として現地の国立公園スタッ フと一緒に2年間活動。自分の興味がある事柄に 積極的に関わっていたら、その「好き」な事にい つの間にか仕事として関われるようにまでなって いた、という物語です。
K			エジプト人 研究者	エジプトとの 出会い	みなさんはエジプトという国にどのようなイメー ジをお持ちでしょうか。エジプトはピラミッドや スフィンクスばかりではありません。エジプトの イスラム女性がヒジャーブで髪や肌を隠すのはな ぜでしょうか？教育制度や料理はどうなっている の？スイーツはどんな感じ？知られていないエジ プトの魅力をお伝えします。

L			里親	里親支援機関 OHANA	さまざまな理由から自分が生まれた家庭で暮らすことのできない子どもたちがいます。OHANAでは、里子、里親支援を行っています。「ひとりひとりが大切にされる地域社会を」目指し活動しています。
---	--	--	----	-----------------	---

上記の「本」の皆さんから個人の体験を話し、参加者たち全員は、初めての経験ではあるが、「本」への質問などを通じて、積極的にコミュニケーションをとることができ、異文化交流を行うこともできた。

(文責 李 偉)

(3) 健康文化研究部会

久留米・筑後地区の健康・スポーツ科学データの集約化は昨年度（2019年2月5日）広川幼稚園における運動能力テストの実施により、その第一歩を踏み出した（全園児248名）。引き続き、2019年度も以下の要領で縦断的な運動能力テストの測定を行っており、初年度の反省のもと新たな測定項目（捕球）がボール投げのバッテリー項目として1種目加わったことと、運動能力の背景となる園児の生活調査も行ったことは新たな取り組みである。

昨年度の初回と同様、測定サポートに入った人間健康学部の学生33名に対して事前に運動能力テスト測定の趣旨、測定法の説明などの確認、そして全ての役割分担までを行った。昨年度に引き続くサポートの学生は7、8名に過ぎないものの、総合子ども学科、スポーツ医科学科の両学科生で構成される（測定験者としての）サポートは少なくとも授業の実習、演習で同様な測定経験を意味する。また、前々日（2/3）の夕方早くに各測定項目の担当責任学生5人と準備に入り、最終的に園側の教諭とも測定法など打ち合わせも行った。さらに、測定当日は大学を8時半に出発、9時到着後、直ちに測定環境を整え、各測定項目の学生全てによるシュミレーションを行い再確認の上、測定に臨んでいる。

昨年度（2019年2月5日）より対象の園児数および測定項目の増に関わらず、本年度の測定も昼休みを目途に20分程の延長で全ての測定を終えている。このことは準備段階から幼稚園の各担任教諭、サポートの学生および園児との連携、協力の賜物である。今後、単なる測定に終らせることなく、測定結果が幼稚園の指導、園児の成長に活かされるようにしたい。

測定日時：令和2年2月5日(水) 10時00分～12時50分

場所・対象：広川幼稚園・園児（年少、年中、年長の計）252名

測定項目：25m走・立ち幅跳び・ボール投げ・捕球

バランス・クロスステップ・ウォークテスト（BCW）の5種目

被測定者の個々のデータは個票として3月23日(月)にフィードバックしており、半年以上の遅延だった昨年度を改善出来たものと考えている。また、年長および年中の園児に関しては、この1年間の変化を含めフィードバックしているが、この1年間における全体の分析は中途の状況である。その

分析結果が終わり次第、夏までを目途に幼稚園および保護者への結果説明を行う。

(文責 満園 良一)

(4) 地域博物館研究部会

運営(研究)テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持しながら地域文化の次世代への継承を目的としている。

運営(研究)計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集(学生への還元)
- ③久留米大学関連資料の保存・収集(学生への還元)

2019年度の活動報告

①史料調査

2016年度より御井図書館所蔵の久留米藩政史料(仮)の調査を実施中である(詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第10号』2017年、参照)。

②歴史講座「久留米藩の学問と教育」(吉田) 令和元年11月9日(土)、久留米市立中央図書館

久留米藩藩校明善堂の創設に尽力した樺島石梁(1754~1828)の事績を中心に、江戸時代久留米地域の学問と教育について平易に解説した。

【当日会場風景】



③公開講座「亀井南冥・昭陽と蜚英館」(吉田)

令和元年11月14日(木)(主催:咸宜園教育研究センター、会場:日田市民文化会館)

日田市教育委員会(咸宜園教育研究センター)は平成23年度より、日田出身の教育者廣瀬淡窓(1782~1856)や、彼が創設した私塾咸宜園について理解を深めてもらう啓発活動の一環として、公開講座

を実施している。2019年度は「江戸時代の私塾と教育者」というテーマで、西日本に点在する私塾と塾を主宰した教育者に焦点を当てる。最新の研究成果を基に、江戸時代の教育と私塾・教育者について理解を深めることが開催の目的である。

回	日付	演題・講師
1	9月26日(木)	『『教育社会』の成立—江戸時代の多様な学び— 中部大学副学長 辻本 雅史氏
2	10月10日(木)	「中井竹山・履軒と懷徳堂」大阪大学教授 湯浅 邦弘氏
3	10月25日(金)	「鈴木文台・惕軒と長善館」兵庫県立大学教授 池田 雅則氏
4	11月14日(木)	「亀井南冥・昭陽と斐英館」久留米大学教授 吉田 洋一氏
5	11月28日(木)	「緒方洪庵と適塾」大阪大学適塾記念センター准教授 松永 和浩氏
6	12月6日(金)	「藤沢東咳・南岳と泊園書院」関西大学教授 吾妻 重二氏

【当日会場風景】



④講演「草場佩川と文人との交流—北部九州を中心に—」(吉田)

令和元年12月8日(日) (主催：公益財団法人孔子の里、会場：多久市東原庁舎)

佐賀県多久市の公益財団法人孔子の里にて、第22回全国ふるさと漢詩コンテストが開催され、その記念講演として、多久出身の漢学者草場佩川(1787～1867)と同時代の文人たちとの交友を解説した。

【当日会場風景】



⑤高良山総合調査

高良山エリアにおいて、文化財の状況把握と、保存活用のための基礎資料の作成を目的に、久留米市による高良山総合調査が開始された。その第1次調査として、平成29年度より3か年の計画で高良大社所蔵歴史資料調査を実施（本学学生も参加）。研究成果の一部を学生へ還元した（久留米市HP、久留米市教育委員会調査報告書第423集参照）。

（文責 吉田 洋一）

（5）福祉コミュニティ研究部会

2019年度は、3年前より研究対象としている「子ども食堂」について、これまでの事例考察や子どもの貧困をテーマとする湯浅氏の講演内容をもとに、「子ども食堂」のもつ社会的意義の探究を深めることを目的に研究活動を行った。以下に、その成果について報告する。

本年度の研究内容を次のように定めた。

研究・活動課題名

- I. 子ども食堂が地域のソフトインフラとなるためのバックアップ機能が充実している機関の事例調査（滋賀県社会福祉協議会、大津市社協）のヒヤリング調査
- II. 子ども食堂では対応できない課題をもつ子どもの貧困対策（個別支援の必要な子ども・家庭支援）を専門職として行っているNPOの実践活動の視察・ヒヤリング調査
- III. 大学周辺の地域住民との交流による子ども食堂の実態

I. 子ども食堂のバックアップ機能が充実している機関の事例調査

1) 滋賀県の子ども食堂推進事業

滋賀県社会福祉協議会は、「淡海子ども食堂—『遊べる・学べる淡海子ども食堂』推進事業」として、県全体の各地に子ども食堂の活動展開を図ることを支援している。2019年12月現在で県内に129か所の子どもの食堂があり、子どもの食堂充足率は沖縄に続き全国第2位である。その主催者は社会福祉法人、NPO法人、学区社協、任意団体など多様であり、活動内容もそれぞれの趣旨に沿った個別のものである。

また、『子どもの笑顔はぐくみプロジェクト』として、子どもの食堂の継続的な運営のバックアップなど、子どもを真ん中においた地域づくりをさらに進めるための応援団をつくるプロジェクトを行っている。具体的には「子ども食堂つながりネットワーク SHIGA」を設立し、研修会や交流会などを行っている。また、県社協から子ども食堂開設助成金が支給され、申請者の選考を行って10万円の開設資金を提供している。

今回の研究目的の一つである、子どもの食堂がどこにでもあるような地域づくりのソフトインフラとなるための条件整備を県社会福祉協議会が行っている事例であると考え。さらに、それを市のレベ

ルで具体化している実態を調査するため大津市社会福祉協議会でヒヤリング調査を行った。

2) 大津市社会福祉協議会の取り組み

調査日時：2020年2月20日(木) 14時～15時

大津市社協では子どもの居場所づくり事業を行っており、その内容は2つに大別できる。

- 1) 課題のある子、気がかりな子を対象とする；トワイライトステイ、フリースペース
- 2) 地域ぐるみで子どもを守り育ていく居場所；学区社協寺子屋プロジェクト、子ども食堂

今回の研究目的により1)の活動に着目する。トワイライトステイは生活困窮者自立支援法に基づき、相対的貧困、ネグレクト、不登校の子どもなど、家庭が安らぎの場所になっていない子どもを対象としている。週に1回、夕方から夜の居場所づくりを行い、少人数の子どもを受け入れて、子どもが大人に甘えることができる環境を作っている。

フリースペースは福祉施設を活用した夜間の居場所で、主なメリットとしては、送迎の車があり、入所者への食事を子どもに提供でき、入浴についても施設のものを利用できることである。さらに子どもが高齢者と関わる経験もでき、双方に良い効果をもたらしている。

市社協の報告では、子どもたちの変化として、感情を素直に出せるようになったり、相手を思いやることができるようになっており、社会福祉施設もその使命を果たしている。

II. 子ども食堂では対応できない課題をもつ子どもに専門職として行っている NPO

1) NPO 法人 こどもソーシャルワークセンター

調査日時：2020年2月20日(木) 16時～20時30分

毎週木曜の夜に開催している「eatalk (イートーク)」に参加させていただき、活動実態を視察した。これはeat(食べながら)talk(おしゃべりしよう)という意味で、誰もが自由に参加でき、いつもの子ども、親子連れ、若者(ボランティア)と一緒にご飯を作ったり、食べながらアットホームな雰囲気ですごすプログラムである。実際には長期にわたる不登校の子ども(小学校2年生から高校2年生くらい)とその親が中心であり、ソーシャルワーカーがその専門性を発揮して、居場所づくりや親支援のための相談を行っている。夕方にマンツーマンでスタッフと銭湯に行くことにより、子どもが心情を漏らしたり、身体の様子から問題発見をすることもある。いわゆる子ども食堂というより、社会福祉援助の介入手段としての食事や遊び場の提供と言える。

2) NPO 法人 山科醍醐こどものひろば

調査日時：2020年2月21日(金) 10時～11時30分

地域のこども劇場活動が母体となって始まった活動であり、子どもたちが心豊かに育つことを目指している。地域にネットワークをつくることにより、専門職だけではない多様な人々がつながって全体でソーシャルワーク機能を担い、子どもの貧困対策や居場所づくりを行っている。

これら2つのNPOはタイプの異なる活動形態で子どもソーシャルワークを展開している。

Ⅲ. 大学周辺の地域住民との交流による子ども食堂の実態

御井校区では、旧御井校区公民館（現府中公民館）を会場に2018年6月から「ぎおんさんの森食堂」を開催している。主催者は「STOP! 子どもの食と心の貧困ボナペティ」という団体で、以前からフードドライブを実施してきたが、その一環として御井校区での子ども食堂を開催するようになった。

視察日：2019年12月22日（日）9：30～13：00 参加総数：約35人

毎月第4日曜日に定期的で開催しており、参加者は低学年の子ども、親子連れ家族、ボナペティを支援している高齢者などで、多世代交流の子ども食堂という特徴をもつ。天気の良い日には食事の前に高良山登りも行う。大学と地域との交流という意味では、以前はフードドライブに参加していた学生もいたが、最近は減ってきており、その参加を促すことが課題である。

（文責 瀧崎 裕子）

(6) 文化財保存科学研究部会

1. 文化財保存科学研究部会 Web サイトの更新（2019年5月24日）

URL：http://kurumbunkazai.jp/

イタリア事業報告書改訂版

比較文化研究所報告会

比較文化研究所活動報告

を追加。



2. 2018年5月イタリア事業報告書の改訂増刷

「久留米大学文化財保存科学研究部会（日本文化紹介：筑後伝統工芸）イタリアレクチャー・デモンストレーション・ワークショップ」と題する事業を、ローマとフィレンツェで開催

2018（平成30）年5月15日にローマで、ローマ日本文化会館と共同で主催して、八女手漉き和紙・久留米緋の解説と実演、八女伝統工芸館が制作した英語パネルによる展示・紹介、同年11月に福岡で開催される「伝統的工芸品月間国民会議全国大会」の宣伝を行なう。16～18日にフィレンツェで開催される文化財保存国際学会（Heri-Tech）に参加し、ブースでの展示と小講義室での解説を行なう。



3. 産学連携プロジェクト

(1) 鹿田産業・下川織物見学（2019年9月3日）

八女簾をはじめとする伝統工芸品のインテリア製品を製作・販売している鹿田産業と久留米緋工房である下川織物を見学。

鹿田産業では会社概要の説明を受けショールームの見学を行った。下川織物では工房を一通り見学した後、代表の下川様より今後の久留米緋についての話を伺う。



(2) 八女和紙と久留米絣で年賀状作り

日時：12月14日(土) 10時～17時

場所：御井本館8階 スカイラウンジBC

八女手漉き和紙職人の溝田氏を講師に招き、和紙や久留米絣の端切れを使った年賀状作りを行った。



(3) リーフレット作成

伝統工芸の国・筑後 第一号

2018年11月2日～4日に開催された「KOUGEI EXPO 伝統的工芸品月間国民会議全国大会」

(福岡県の伝統工芸品：<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/gaiyou-dentoukougei.html>)

(4) 八女手漉き和紙プロモーション映像「ココロ漉ク」製作

<https://www.youtube.com/watch?v=3Kg0X0LlTLM>

「令和元年度福岡県文化発信プログラム推進費補助金」

(<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/r1bunkapurogram-saitakukekka.html>)

訃 報

文化財保存科学研究部会研究協力者でいらした中野三敏先生が、11月27日にお亡くなりになりました。発足時から惜しみなくご助力下さった御恩に深く感謝申し上げます。12月11日「日経新聞」夕刊に、ロバート・キャンベル氏（文学研究資料館館長）の追悼文が掲載されました。

(文責 原口 雅浩)

(7) 民事法研究部会

活動なし

(8) 地域社会経済研究部会

1. 経済学部地域経済社会研究所との共同研究

本プロジェクトは、大学院前期課程社会経済専修コースの勉強会として立ち上げている。研究所に

においては、大矢野、松下が中心となって活動しており、予算の関係で、経済学部地域経済社会研究所（大矢野、松石、葉山、畠中）との共同研究として行っている。

本年度の特徴は、インドネシアの工業化促進のための方策研究について松下や大矢野が調査研究を担当し、インドネシアのグナダルマ大学長とその関係者6人が来航された。また、マレーシアについては、大矢野や松下を中心として経済学部の学生11人とともにマレーシア・サラワク大学と久留米大学との姉妹校交流を行った。この後、サラワク州の総合的な開発計画についてサラワク政府とクチン市との間に連絡会を開催し、マレーシア・サラワク州における開発計画の提言書についてサラワク州首相に説明を行った。また、大川市とクチン市との交流を促進して、家具産業の現地進出や自然環境の再生問題について共同研究を進めることを提案している。

2. 公開講座の実施

(1) 「大川学」、「うきは学」、「小郡学」の開催

「大川学」は、久留米大学と大川市の連携協定を背景として、大川市の歴史と市民生活と題して、大川市風浪宮の歴史、筑後川の民話、筑後平野と九州の民謡について解説をおこなった。

「うきは学」は、久留米大学とうきは市の連携協定を背景として、うきは市の歴史と市民生活と題して、うきは市と邪馬台国の歴史、筑後川の民話、筑後平野と九州の民謡について解説をおこなった。

「小郡学」は、久留米大学と小郡市との連携協定締結を前提に、小郡市松崎の旅籠油屋において、小郡市の歴史と肥後街道、松崎の飛鳥（飛鳥）、英彦山詣での意味、市民生活と筑後平野の民謡について解説をおこなった。

(2) 九州王朝論

古田武彦氏を始祖とする「九州王朝論」を「古田考古学」の後継者として福山氏が担当している。また、これを受けて、久留米大学公開講座の代表的なシリーズとして開催されている「九州王朝論」は全国的にも有名な久留米大学の公開講座となっている。

特に、古田氏亡き後、文学部の福山裕夫教授を中心とした「九州王朝論—総括シリーズ」と大矢野主催の「九州王朝論」は双璧となっている。

5月～11月は『古事記』と『日本書紀』に登場する歴代天皇の歴史について、九州王朝論としての根拠をシリーズとして説明した。

(1) 第1回は、神武天皇から欠史八代といわれる歴代天皇と仲哀天皇・神功皇后までの活躍について九州王朝論の関係で説明した。

講座タイトル		日本の古代史を九州王朝を前提に検討する-1	18:30～20:00御井キャンパス
講座概要		『古事記』・『日本書紀』の世界を九州王朝論を前提として神武天皇から神功皇后までを考察する。	
	日時・会場	演 題	
1	5月10日（金）	神武天皇から開化天皇までの九州王朝	
2	5月17日（金）	崇神天皇から垂仁天皇、景行天皇と九州王朝	
3	5月24日（金）	倭武尊と倭姫、成務天皇と九州王朝	
4	5月31日（金）	仲哀天皇と神功皇后と九州王朝	

- (2) 第2回目は、応神天皇とその後継者を自認する継体天皇・欽明天皇の流れが、肥後・豊後・豊前に広がることを説明した。

タイトル	日本の古代史を九州王朝を前提に検討する-2		
講座概要	『古事記』・『日本書紀』の世界を九州王朝論を前提として応神天皇から天智天皇までを考察する。		
コマ	日時・会場	演 題	
1	7月5日(金)	応神天皇から雄略天皇、武烈天皇と九州王朝	
2	7月12日(金)	継体天皇と倭の五王と九州王朝	
3	7月19日(金)	聖徳太子の世界と九州王朝	
4	7月26日(金)	乙巳の変と天智天皇、蘇我入鹿と馬子	

- (3) 第3回目は白村江の戦いとそれ以後の遣唐使の時代、菊池武光、平家の日宋貿易の時代までの、有明海と大陸との関係等について説明した。

講座タイトル	日本の古代史を九州王朝を前提に検討する-3		
講座概要	『古事記』・『日本書紀』の世界を九州王朝論を前提として斉明天皇から天武・持統天皇までを考察する。		
コマ	日時・会場	演 題	
1	11月1日(金)	斉明天皇と白村江の戦い、九州王朝論	
2	11月8日(金)	郭務棕と九州王朝論	
3	11月15日(金)	壬申の乱と天武天皇、九州王朝論	
4	11月22日(金)	遣隋使と遣唐使の役割と倭国	

- (4) 第4回目は邪馬台国論争について、福島正彦先生と共に九州王朝論との関係で邪馬台国がうきは市であることを説明した。

講座タイトル	日本の古代史を邪馬台国と九州王朝について検討する		
講座概要	邪馬台国の舞台、古事記・日本書紀の舞台は北部九州、特に筑後と肥後の古代史として考察される		
コマ	日時・会場	演 題	講演者所属役職
1	9月13日(金)	徐福と邪馬台国	久留米大学経済学部 教授
2	9月20日(金)	邪馬台国の位置	建築技師・郷土史家
3	9月27日(金)	邪馬台国とは何か?	建築技師・郷土史家
4	10月4日(土)	邪馬台国と神武天皇	久留米大学経済学部 教授

3. 佐賀低平地研究会地域創生専門部会との共同開催プロジェクト(大矢野、松下愛)

(1) 見学会「佐賀の歴史」日時：令和1年10月25日(金)

場 所：佐賀県内の歴史探索 参加者：30名

久留米大学の学生と龍谷短期大学の学生等30人と佐賀県内の吉野ヶ里、佐賀城本丸公園の見学会を開催した。

弥生時代の吉野ヶ里の説明においては、徐福伝説とその後の邪馬台国時代との関係を説明した。また、佐賀城本丸公園においては、幕末の佐賀藩の文化と技術についての説明に参加者は深い関心を示していた。

(2) 勉強会「筑後川と有明海の交易の歴史」

佐賀低平地研究会地方創生部会との共同研究では、有明海の歴史と経済についての研究が本年度のテーマであった。この本年度の勉強会の成果として「七夕神社」、「交易の海有明海」、「経済地理としての古代史—『古事記』・『日本書紀』から学ぶ—」の冊子を発行した。

「七夕神社」は、かつて邪馬台国の卑弥呼の時代や神武天皇の時代、博多湾と古代有明海は鷺田川

の大城から豊満川の津古、豊満川の古代有明海の河口であった大崎まで川で繋がっていたことを説明するのが、小郡市大崎の「七夕神社」であることを説明した。

「交易の海有明海」は、徐福の時代から遣唐使船の時代、そして、古代のみならず、近世も減退においても、有明海の干満差をもたらす潮の満ち引きが交易の海としての有明海であったことを有明海のツインシティーズから説明できることを開設している。

「経済地理としての古代史—『古事記』・『日本書紀』から学ぶ—」は、『古事記』・『日本書紀』の中に有明海の描写がいたる所に登場することを説明した。

4. 物流新幹線構想

- (1) 青森中央学院大学との連携で「物流新幹線構想を蟹田港に」という物流新幹線構想について、あらためて日本海経済圏との関係で論ずることを確認している。
- (2) 佐賀県と長崎県、大分県には、「長崎新幹線を物流新幹線構想に」というテーマで政策提言を行っている。この議論は毎年定期的に「肥前殖産の会」においても検討している。

(文責 大矢野 栄次)

(9) 地域精神保健福祉研究部会

1. はじめに

近年、医療や福祉などの分野において「Quality of life (以下 QOL) : 生活の質」が1つの重要な指標として捉えられている。子どもの QOL・自尊感情の低下は小学校4年生頃から目立つが、様々な精神疾患の発症例が増える時期と一致する¹⁾。

幼児期から青年期までの子どもの問題行動(精神疾患を含む)は、大きく2つの群に分類される。「統制不全／外在化型」(undercontrolled／externalizing)と「統制過剰／内在化型」(overcontrolled／internalizing)である。まず「統制不全／外在化型」(以下、外在化)の子どもは、与えられた状況下で年齢相応な行動の統制が欠落しているか、不十分であるために他者に対して問題を起こす傾向にある。主に「注意欠陥・多動傾向」、「攻撃的・反社会的行動傾向」、「過度な反抗傾向」などがみられる。一方、「統制過剰／内在化型」(以下、内在化)の子どもは、他者よりも本人にとって多くの問題が生じ、自分自身で厄介な不安や緊張を訴えることが多い。すなわち、恥ずかしい、不幸で、愛されていない、他の子どもに比べて劣っているなどの感情である。主に「過度の不安や心身症状」、「社会的引きこもり」、「抑うつ」などがみられる^{2~5)}。

本研究では、子どもの問題行動が表面化あるいは深刻化し、その問題行動の軽減・予防には QOL が影響しているという仮説のもとで、子どもの主観的な視点で評価される子ども版 QOL 尺度「KINDL[®]」と子どもの問題の特性(向社会性、多動／不注意、行為、情緒、仲間関係)を把握できる行動スクリーニング尺度「Strengths and Difficulties Questionnaire」(以下 SDQ)の関連性について分析することを目的としている。

以下、実施した2つの調査研究について報告する。

2. 小中学生に対する横断調査

2-1. 日時・対象者・方法など（省略）

2-2. 結果

SDQ の活用について Goodman ら（2010）は、低リスクあるいは一般のサンプルでは、SDQ の下位尺度を「外在化問題」（多動・不注意＋行為）、「内在化問題」（情緒＋仲間関係）、「向社会性」に尺度を分けて、幅広い構成要素を調べる研究の場合には適しているとしている⁶⁾。本研究の対象者も一般サンプルであるため、同様に下位尺度を「外在化問題」、「内在化問題」、「向社会性」の3つに分けた。さらに、Goodman（1997）の研究⁷⁾や Matsuishi ら（2008）の研究⁸⁾を参考に、各小中学校において独自のカットオフ値を算出し、3つのカテゴリー（高位：10%、中位：10%、低位：80%）に分類した。

QOL 得点（総得点、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友達、学校生活）と SDQ 得点（向社会性、外在化問題、内在化問題、総合困難度）の2変数間の相関分析の結果、

調査対象の3校に共通して子どもの QOL 得点と SDQ の肯定的な行動特性（向社会性）との間には正の相関がみられた。一方、子どもの QOL 得点と否定的な行動特性（外在化問題、内在化問題、総合困難度）との間に負の相関が確認された。

3. 中学生に対する縦断調査

3-1. 日時・対象者・方法など（省略）

3-2. 結果

C 中学校に対する横断調査の結果をもとに、SDQ の全ての項目において支援の必要性がなし（「低位」）と判定された男子 D の推移、「向社会性」と「外在化問題」に支援の必要性があり（「中位」or「高位」）と出ている男子 E の推移、そして「内在化問題」と「総合困難度」に支援の必要性があり（「中位」or「高位」）と出ている女子 F の推移を検討した。

①支援の必要性がありと出ている男子 E と女子 F は、男子 D と比べて QOL 得点の変動の幅が大きい。

②男子 E は、「外在化問題」や「向社会性」に問題行動が出やすく、また女子 F は「内在化問題」に問題行動が出やすいといったように中学生によって違いがみられた。

③QOL が低くなった時、もしくは QOL が低くなった後に問題行動が出やすくなる傾向がみられた。

引用文献

- 1) 古荘純一（2011）「小学生版および中学生版 QOL 尺度を用いた精神疾患の早期発見の検討」『日本小児科学会雑誌』115（4），日本小児科学会，pp.760-768.
- 2) Achenbach, T. M., Edelbrock, C. S. (1978) "The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts", *Psychological Bulletin*, 85 (6), pp.1275-1301.
- 3) Davison, G. C., Neale, J. M. (1998) 『異常心理学』（村瀬孝雄監訳），誠信書房，pp.439-465.
- 4) 菅原ますみ（2003）『個性はどう育つか』，大修館書店，pp.169-171.
- 5) 山形伸二・菅原ますみ・酒井厚・ほか（2006）「内在化・外在化問題行動はなぜ相関するか」

「関係性の行動遺伝学的解析」『パーソナリティ研究』15(1), 日本パーソナリティ心理学会, pp.103-119.

- 6) Goodman, A., Lamping, D. L., Ploubidis, G. B (2010) "When to use broader internalizing and externalizing subscales instead of the hypothesized five subscales on the Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ): Data from British parents, teachers and children", *Journal of abnormal child psychology*, 38 (8), pp.1179-1191.
- 7) Goodman, R. (1997) "The Strengths and Difficulties Questionnaire : A research note", *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38 (5), pp.581-586.
- 8) Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., et al. (2008) "Scale properties of the Japanese version of the Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples", *Brain & Development*, 30, pp.410-415.

(文責 辻丸 秀策)

(10) 心理教育研究部会

協同教育研究所「結風」主催

2020年3月10日(火)

第7回「協同教育フェスタ」の報告

代表 安永 悟

(久留米大学文学部)

第7回「協同教育フェスタ」を下記の要領で開催したので報告する。

今回のメインテーマは「協同学習と探究」であった。高等学校の学習指導要領の改訂に伴い、これまでの「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と名称を変え、探究の重要性が強調されている。探究活動は大学教育でも多様に実施されている。今回は大学におけるPBL(問題解決型学習)の実践例を中心に、協同学習の観点から探究を取り入れた授業づくりについて議論を深めた。

なお、本フェスタは久留米大学比較文化研究所の後援を受けている。また、初年次教育学会の「初年次教育実践交流会」、日本協同教育学会の「九州地区研究会」、全国個集研の「支部研究会」としても認められている。

記

1. 日 時：2019年7月20日(土) 10時～17時まで。(受付9:30-10:00)
2. 場 所：久留米大学御井キャンパス 学生会館ミーティングルーム
3. 参加資格：初年次教育や協同教育(学習)を初めとした教育一般に関心のある方
4. 参加申込：協同教育研究所「結風」のHP (<http://yuikaji.me/wiki.cgi>) から
5. 参 加 費：無料
6. 協同教育フェスタの内容

メインテーマ「協同学習と探究」

- (1) 挨拶・導入 35分 (10:00-10:35)
- a. 担当：安永 悟 (久留米大学)
- b. 内容：協同教育フェスタの目的と内容の説明、および学びの場づくり。協同学習の基本的な考え方と技法を体験的に学んだ。(休憩10分)
- (2) 理論的解説 75分 (10:45-12:00)
- a. 題目：協同実践力を育む LTD 授業モデル：LTD 基盤型 PBL を手がかりとして
- b. 講師：安永 悟 (久留米大学)
- c. 内容：協同実践とは協同の精神と科学的探究に基づく実践をさし、協同実践を実行できる力を協同実践力と呼んでいる。いま高等学校で求められている「探究の見方・考え方」を働かせ、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力」に対応する。本解説では協同実践力を育む授業づくりを LTD 授業モデルを手がかりに検討した。その際、今回は LTD 基盤型 PBL に焦点をあて、午後の実践研究につなげた。(昼食60分)
- (3) 実践研究 1 75分 (13:00-14:15)
- a. 題目：PBL 形骸化脱却への挑戦
- b. 講師：小松 誠和・中村 桂一郎・原 樹・安永 悟 (久留米大学)
- c. 内容：本学において形骸化した PBL を再興すべく、私たちが協同学習を導入してから3年目に入った。過去2年の取り組みでは、小グループを担当する教員がそれぞれ独自に PBL を運営していたが、必ずしも協同学習が実践されているとは言い難い面もあった。そこで3年目の今年は大きな飛躍を目指し、様々な変更を試みた。本発表では、本年度成功した取り組みや失敗した取り組みについて紹介し、大学教育において協同学習を根付かせるためには何が必要かを再考した。(休憩15分)
- (4) 実践研究 2 75分 (14:30-15:45)
- a. 題目：大学初年次における「探究的学び」をどのように実現するか？：
全学必修 PBL 科目の実践を手がかりに
- b. 講師：長濱 文与 (三重大学)
- c. 内容：三重大学では「探究的学び」を展開する力の育成・向上を目指して、大学の初年次を対象としたプログラムを展開してきました。しかし、初年次の必修科目としてどこに焦点を当てるのが適切なのか、学生の探究への意欲を大切にしつつ授業としての質保証をどう実現するのか、組織として展開していくことの難しさなど、多くの課題も抱えている。これらの点について、具体的な授業実践を紹介しながら、参加者と意見交換をした。(休憩15分)
- (5) 協同教育カフェ (全体交流) 55分 (16:00-16:55)
- a. ファシリテーター：須藤 文 (久留米大学)
- b. 内容：協同学習に関して、参加者が疑問に思っていることや質問したいこと、さらには自分の実践について、参加者同士が自由に交流しながら理解を深めた。本カフェも協同学習の考え方と技法を用いて構成し、協同学習の経験知を高める場としても活用した。

(6) 事務連絡・閉会

5分 (16:55-17:00)

7. 懇親会

研究会終了後、学内レストラン「樺」にて懇親会（情報交換会）を実施した。

8. まとめ

今回は60名を超える参加者があった。事前登録のあった参加者51名の内、大学教員35名（学外26名、学内9名）、大学院生7名（学外2名、学内5名）、専門学校・高校・小学校の教員を含むその他が9名であった。大学教員の専門は幅広く、文学・理学・生物学・薬学・看護学・医学・音楽・美術・法学・農学・科学などであった。福岡県内からの参加者が多かったが、北海道・新潟・東京・名古屋・京都・大阪・岡山・山口・大分・沖縄など、全国からの参加があった。

懇親会には29名が参加し、情報交換と親睦を図ることが出来た。

(文責 安永 悟)

(1) 会計専門職研究部会

(1) 研究目的

会計専門職研究部会は、会計専門職（公認会計士・税理士）の実態と制度に関する研究を目的としている。

主な研究対象として、大手3大監査法人、EY 新日本有限責任監査法人、有限責任監査法人トーマツ、有限責任あずさ監査法人を取り上げ、福岡オフィスへの訪問、本学学生を引率しての体験学習の実施、シニアマネジャーやパートナーなど幹部クラスの公認会計士との意見交換等を行なっている。さらに、日本公認会計士協会北部九州会の役員（会長・副会長）との意見交換や情報共有を行なうことにより、地元経済や企業の動向を明らかにすることができる。

また、九州北部税理士会との関係強化を図り、租税教育推進部委員としての税理士との意見交換や実態調査を行なっている。北部九州における中小企業の経営実態や動向を明らかにすることができる。

(2) 2019年度の活動内容

①日本公認会計士協会北部九州会による講演会の企画・実施（通算、8回実施）

2019年6月25日(火)：久留米大学御井学舎

内容：制度説明会・職業紹介（担当者説明・パンフレット配付等）、ビデオ教材、

合格体験談、質疑応答、アンケート記入、会計専門職への受験説明、等

協会講演者：日本公認会計士協会 北部九州会

渉外広報委員会委員長 久保 英治氏（公認会計士、EY 新日本有限責任監査法人）

上村 啓之氏（公認会計士、PwC あらた有限責任監査法人）

吉田 知生氏（公認会計士、EY 新日本有限責任監査法人）

TAC・福岡校広報担当・須藤 一雄氏（ライセンスプランナー）

大原簿記情報専門学校福岡校課長・宮崎 隆氏

課長補佐・楠森 光倫氏

②財務省福岡財務支局による夏季中学生向け講座2019の実施

2019年7月28日(日)：久留米大学御井学舎

内容：優しいお金の話！（担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等）

講座担当者：財務省福岡財務支局財務広報相談室 中濱 良孝氏

③九州北部税理士会による夏季中学生向け講座2019の実施

2019年7月28日(日)：久留米大学御井学舎

内容：中学生向け租税教室（担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等）

協会講座担当者：九州北部税理士会 租税教育推進部委員

中村 和洋氏（税理士）

④監査法人（公認会計士オフィス）への体験学習プログラム実施

2019年9月12日(木)：トーマツ有限責任監査法人（福岡市天神オフィス）

対応公認会計士：高尾 圭輔氏（公認会計士パートナー）

阿部 万喜子氏（公認会計士）、ほか日本公認会計士協会準会員数名

内容：本学学生の体験学習（担当者説明、DVD教材、オフィス内見学、経営分析の事例研究、

公認会計士試験合格者による体験談、質疑応答、アンケート記入、等）

2019年9月20日(金)：EY 新日本有限責任監査法人（福岡市天神オフィス）

対応公認会計士：宮本 義三氏（公認会計士、シニアマネジャー）

山田 葉月氏（公認会計士）

林田 俊介氏（公認会計士）

中田 悠公氏（日本公認会計士協会準会員）

内容：本学学生の体験学習（担当者説明、DVD教材、オフィス内見学、経営分析の事例研究、

公認会計士試験合格者による体験談、質疑応答、アンケート記入、等）

⑤第44回西日本高等学校簿記競技大会 参加校教員（21名）への説明

2019年11月3日(日)：久留米大学御井学舎

内容：簿記会計教育の現状、久留米大学での会計専門職教育への取組み、

教職課程（商業科教育法）での指導内容、簿記会計教育に関する情報共有、等

⑥財務省福岡財務支局による講演の実施（通算、6回実施）

2019年11月18日(月)：久留米大学御井学舎

担当者：財務省福岡財務支局 財務主幹 井 秀典氏

財務広報相談室 溜渕 孝浩氏

内容：北部九州地域の経済情勢等について

～財務省の地域経済ウォッチャーとしての取組みから～

（担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等）

(北部九州地域の産業・景気動向・統計資料等、財務省調査より)

⑦経済産業省九州経済産業局による講演の実施(通算、2回実施)

2019年12月10日(火):久留米大学御井学舎

担当者:総務企画部総務課 総括係長 田中 幸仁氏

人事係 玉井 祐弥氏

内容:九州の持続的発展に向けた取組、九州の“未来づくり”のために

大学生向け講座(担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等)

⑧九州北部税理士会による冬季中学生向け講座2019の実施

2019年12月21日(土):久留米大学御井学舎

内容:中学生向け租税教室(担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等)

協会講座担当者:九州北部税理士会 租税教育推進部委員 中村 和洋氏(税理士)

⑨日本政策金融公庫による講演会の実施(通算、2回実施)

2020年1月7日(火):久留米大学御井学舎

担当者:日本政策金融公庫 国民事業部 福岡創業支援センター所長 宮本 大資氏

内容:ビジネスプラン作成講座 アイディアを考える

大学生向け講座(担当者説明、教材配付・パワーポイント使用、等)

⑩日本公認会計士協会北部九州会主催、「新春のつどい」への来賓出席

2020年1月10日(金):西鉄グランドホテル(政界、財界、官界、各種団体・協会出席)

関連団体・業界関係者との意見交換、懇談、等。

日本公認会計士協会北部九州会(渉外広報委員会委員)による講演会の様子:2019年6月25日(火)



有限責任監査法人トーマツ（福岡オフィス）での体験学習の様子：2019年9月12日（木）



EY 新日本有限責任監査法人（福岡オフィス）での体験学習の様子：2019年9月20日（金）



第44回西日本高等簿記競技大会の引率教員（商業高校で簿記会計を指導する先生方）に対するレクチャーと商業教育についての意見交換会（簿記会計教育に関する情報共有、等）：2019年11月3日（日）



（文責 杉野 博貴）

(12) 日本アジア比較文化研究部会

1. 公開講演会

カイロ大学教授ワリード・イブラヒム氏をお招きし、下記の内容の講演会を実施した。

期日：6月27日

会場：久留米大学

テーマ：「アラブ文化・イスラーム文化—文化・ことば・アラブの気質」

氏は、アラブの気質について、アラブ世界のイスラーム化以前と以後と比較して、次のような詩を引用して、述べた。

以前の詩

「よく知れ 谷間に並ぶわが陣営／わが部族の人たちを／攻めくるものに死を与え／友には食物を与えん／われらに大義あり それを固く守る／われらの選びし この宿営の村／われらを怒らすなかれ／心静まるまで平和のかけらを残さじ／われらは従う者を固く守る／そむく者は力をもって倒さん／（以下略）」

アムル・イブン・クルスーム（?－584）

以後の詩

「主よ、私の数ある罪は大きいとしても あなたのお宥しはもっと大きいことを知っている。／もし善人があなたを求めないならば、罪人は誰を頼り、誰にすがるか／主よ、あなたがお命じになったように、嘆願する。もしあなたが私の手を払ったら、誰が憐れんでくれるのか。／私があなたに近づくすべては嘆願と あなたのお宥ししかない。それに私はムスリムだ。」

アブー・ヌワース（762－813）

氏は、イスラーム以前の「力」のアラブ世界から、イスラーム以後の「こころ」の世界への変化を、ユーモアを交えながら述べた。

2. エジプト・カイロ大学主催国際シンポジウム「非西欧化社会における近代化の再考」への参加

昨年に引き続き、本学の学術交流協定校であるカイロ大学日本研究センターの国際シンポジウムに参加した。シンポジウムの内容は以下の通りである。

会期：2020年3月7日～8日

会場：カイロ大学

シンポジウムは、基調講演を含めて歴史、文化、思想、文学、教育など9セッションが実施された。日本大使館の野毛大使、カイロ大学長らのあいさつの後、1日目の基調講演は、文化功労者で元号「令和」発案者の万葉学者中西進氏「近代化と不易流行」ほかであった。2日目の基調講演は一橋大学名誉教授田中克彦氏「言語の社会的存在形態と国語」であった。

本学関係者の発表は以下の通りである。

○日本近現代文学

「西洋のオリエンタリズムと日本のアジア主義」（浦田義和）

「安岡章太郎の『ガラスの靴』と池澤聡『ハウスガード』から見る植民地下の『ガード』の心理的葛藤」
(アハマド・ラハミー)

○日本語教育

「日本語教育と協同学習」(岩田好司)

「久留米大学留学生別科における『日本事情』講義について」(与小田隆一)

○若手研究者

「日本現代詩とアラブ現代詩の比較研究」(ガーダ・アブデルカリーム 久留米大学大学院)

「日本語とアラビア語における受動態の分析」(エル・モンタセル 久留米大学大学院)

図1 講演会ポスター

2019年度 聴講自由

第1回<越境>講演会

アラブ文化、イスラム文化



講 師 ; ワリード・イブラヒム 氏
(エジプト・カイロ大学教授)

日 時 ; 6月27日(木) 16時40分~18時10分

会 場 ; 久留米大学御井学舎11A教室(本館1F)

言 語 ; 日本語

主催 : 久留米大学比較文化研究所日本・アジア比較文化研究部会「<越境>研究会」

問い合わせ : 比較文化研究所 アハマド・ラハミー (内線2643)

図2 国際シンポジウム



(文責 浦田 義和)

(13) 歴史科学研究部会

2019年度は、人類遺伝学、海洋考古を中心に、本年度に報告された学術論文、著作物をもとに、九州地方の民俗学、神社伝承等について検証を行った。

主に九州王朝論についての共同研究者である古賀、正木、服部らは、難波の宮および大宰府の条坊制、老司式の瓦、姫氏伝説などについて考察を行い、古代に真実を求めて——倭国古伝—姫と英雄（ヒーロー）と神々の古代史（明石書店 ISBN-13: 978-4750348193）を2019年4月に出版し、2020年4月2日には、『古事記』『日本書紀』千三百年の孤独：消えた古代王朝（明石書店 ISBN-13: 978-4750349985）が完成予定である。

本学地域連携センターの企画する久留米大学公開講座においても、神功皇后伝承ではファンの多いひもろぎ逍遙（ペンネーム）の講演と合わせて、本年は毎回70人前後（計16回）の古代史ファンが御井本館に集うこととなった。大矢野は、九州地方の遺跡と神社伝承について、日本書紀との相似性についてその意義を考察した。

福山については、国際的に評価の高い人類遺伝学の文献について解説し、BT3000前後の東アジアの人類移動と弥生 BC1000年の関連性について講演した。また、BC1000—AD800までの、月日食および古記録について、ビジュアル化し、古記録の現象が北緯33度（熊本）と35度（京都）でいくつかの違いがあることを解説した。

本年度の出版、成果物について、比較文化研究所において2020年3月15日にセミナーを行う予定であったが、諸般の事情（新型コロナウイルス）により中止としたことは残念であった。

本稿では、古天文と星信仰について、紙面の関係から若干の考察と計画を紹介をしたい。日本書紀、

古事記、もしくはそれ以降の民俗を記述した日本霊異記等においても、アマテラスや大日菩薩を中心とした太陽信仰は多くの記述、伝承、それに基づく祭りなどの儀式があるところであるが、月や星については比較的少ないのが一般的な見方である。

このことについては、従来より民俗学を中心とした多くの研究者が示してきたとおりである。その推察は様々であるが、戦後の唯物論からそのことを推論することさえ非科学的とされたり、単純な征服—非征服論で封印された、面白いところでは朝廷によって邪教とされたなど、数少ない伝承や記録を単に社会構造に照らして推察されたもの多かった。2000年以降、従来からなぜかあまり重視されてこなかったC14トレーサーや年輪年代にくわえ、微量な同位体の検出技術や遺伝学の進歩によって、従来では大まかな文化がAD400以降に半島からもたらせたものでよかったものが、南方アジアやその海洋文化を無視できなくなり、現在では縄文土器が最古の土器？とされたり、弥生時代の始まりがBC1000前後とされている。これらの科学的なエビデンスは、実は日本の考古学的なイニシアチブではなく、脱アフリカ大陸からつづく人類移動や宗教的なオリジンに対する世界的な関心の高さにあり、世界中の研究機関が盛んに研究することになってきたことにもとを発する。一方これらの知見は、近年遺伝学的な日本人論や従来からの柳田国男の「海の道」に対する関心を惹起しており、ひいては本邦の海神族、航海術、それに基づく暦や天文についての興味となる。日本各地の航海や星信仰は、カペラやスバルといった星名がかなりのバリエーションを持ったものであるが、大まかに西九州から半島（あるいは北東部も含む）、九州南部から紀伊、房総、瀬戸内、島根、鳥取を境とした日本海側とその他北部本州内陸と、大まかに数群になっている。その中で、星信仰（妙見）や夜神楽での荒神舞や神おろしについては、北辰や（節句ごとの）星をテーマとしている。例を挙げるなら、南九州地方の神楽は、夜神楽と昼神楽があり、前者が冬至前後、後者が春分にかけて行われ、その分布は山間部、海、もしくは島嶼部である。冬至前後の夜神楽については、天蓋に北辰を描き、荒神における口上は関東に類似したりするなどである。

次に、共同研究者である正木らの出版物（ISBN-13: 978-4750348193）の要点を記載する。

第1部「姫たちの古代史」として、太宰府に來たペルシアの姫、大宮姫と倭姫王・薩末比売、肥前の「與止姫」伝承と女王壹與、糸島の奈留多姫命伝承と「日向三代」の陵墓、駿河国宇戸ノ濱の羽衣伝承、常陸と筑紫を結ぶ謡曲「桜川」と「木花開耶姫」など、古代伝承と学術的知見の関係性について述べている。第2部の「英雄たちの古代史」では、各地に残る英雄伝説や最近話題の聖徳太子伝承についても考察を行い、讃岐「讃留靈王」伝説の多元史観的考察、丹波赤湊神社縁起の表米宿禰伝承、六十三代目が祀る捕鳥部萬の墓、関東の日本武尊、筑後と肥後の「あまの長者」伝承、天の長者伝説と狂心の渠、そして聖徳太子について述べている。第3部「神々の古代史」では、神話（日本書紀）とそれに類似もしくは派生、地域独自の伝承（鹿児島のカハチ伝説）等を、ホモロジーとして考察、推論を行い、縄文にいたイザナギ・イザナミ、「天孫降臨」と「神武東征」の史実と虚構、天孫族に討たれたあらぶる神、「国譲り」と「天孫降臨」、紀国の鎮西将軍伝承、恩智と玉祖—河内に社領をもらった周防の神さま、日本海側の「悪王子」「鬼」伝承、安曇野に伝わる八面大王説話、甲斐の「姥塚」深訪、荒覇吐神社の現地報告—和田家文書から見た風景、羽黒山修験道と九州王朝といった著述を展開している。今後、半島南部との民俗交流や世界的な民俗学的知見との相同性について、さらなる展開が期待される。

以上、現在までの様々な歴史的な修飾の蓄積の結果ではあるものの、これらの比較研究は前述の古代アジアにおける人類移動に対する関心と相まって、他のアジア諸国でも盛んになっていくものと考えられる。

(文責 福山 裕夫)

(14) 筑後川流域圏研究部会

筑後川流域圏研究部会

筑後川流域圏研究部会においては、2015年までのプロジェクト研究においては、筑後川流域圏を下流から上流まで、5つの地域に区切り、下流から上流まで2年ごとに研究していくというものであり、2年に1度地域ごとに研究報告書を発行してきたが、2016年度から研究部会として再発足してからは、流域圏の一部または全体について、メンバー各自がテーマ別に研究を行う方式をとるようにしている。

2019年度においては、これらに加えて、2019年度に寄贈された「古賀河川図書館」の全蔵書の活用に関する研究会を開催した。

メンバー各自の研究については、のにおいては、下記のような報告が出された。

浦田義和：北原白秋「天草雅歌」と「台湾紀行」を比較して

河内俊英：筑後川上流域の再生可能エネルギー

吉田洋一：高良大社所蔵歴史資料調査（典籍編）

また、2019年度に、古賀河川図書館の全蔵書の、久留米大学御井図書館への寄贈が実現した。

古賀河川図書館は、古賀邦雄氏の蔵書を「古賀河川図書館」として公開しているものである。蔵書数約13,000冊の日本最大級の河川専門図書館として知られているものであり、河川行政・研究者などを中心に、毎月多数の人が訪れている。筑後川流域圏の研究にとっても重要なものであり、それを受けて、筑後川流域圏研究部会において、古賀河川図書館蔵書の活用に関する研究会を発足させた。2019年度においては、2回の研究会を開催した。

以下は、報告が出された、3名の個人研究の成果および古賀河川図書館の活用に関する研究部会の報告である。

(文責 浅見 良露)

(1) 北原白秋「天草雅歌」と「台湾紀行」を比較して

浦田 義和

2019年度は、「天草雅歌」の再調査に基づいて、白秋「台湾紀行」の詩との比較を行った。

「天草雅歌」は、1907（明治40）年、白秋23歳の時のいわゆる“五足の靴”旅行を基にして作られた11篇の詩である。

一方『台湾紀行』は、1934（昭和9）年、白秋50歳の時の台湾旅行を基に書かれた紀行文である。この紀行文の中に5篇の詩が収録されている。

以下、両者を比較してみる。

「天草雅歌」の巻頭詩「角を吹け」は

「わが佳耦（とも）よ、いざともに野にいでて／歌はまし、水牛の角を吹け。／視よ、すでに美果實あからみて／田にはまた足穂垂れ、風のまに／山鳩のこゑきこゆ、角を吹け」

と始まる。「角笛」はこの場合、礼拝の合図を意味していると取ると、「歌」は、讃美歌であろうか。そうするとキリスト教的雰囲気が醸し出されているが、「美果實あからみ」「足穂垂れ」「山鳩のこゑ」と極めて感覚的である。次に

「いざさらば馬鈴薯の畑を越え／爪哇（ジャワ）びとが園に入り、かの岡に／鐘やみて蠟の火の消ゆるまで、／無花果（いちじゅく）の乳をすすり、ほのぼのと／歌はまし、汝が頸の角を吹け。」

と続く。「爪哇（ジャワ）びと」で南蛮的雰囲気を漂わせているが、「無花果（いちじゅく）の乳をすすり」は、官能的である。続いて

「わが佳耦（とも）よ、鐘聞こゆ、野に下りて／葡萄樹の汁（つゆ）滴る邑を過ぎ、／いざさらば、パアテルの黒き袈裟／はや朝の看経（つとめ）はて、しづしづと／見えがくれ棕櫚の葉に消ゆるまで、／無花果（いちじゅく）の乳をすすり、ほのぼのと／歌はまし、いざともに角を吹け、／わが佳耦（とも）よ、起き来れ、野にいでて／歌はまし、水牛の角を吹け。」

と終わる。「葡萄樹の汁（つゆ）滴る」「無花果（いちじゅく）の乳をすすり」と重ねられるイメージは、殊に“女性”を表象している。

このように見てくると、「角を吹け」は、讃美歌と女性のイメージが支配している詩といってよいだろう。

「天草雅歌」の他の詩でも、「女性」特に「乙女」イメージが頻出する。

例えば詩「汝にささぐ」である。

「女子（をみなご）よ、／汝に捧ぐ、／ただひとつ。／然はあれ、汝も知らむ。／このさんた・くるすは、かなた／檳榔樹の實の落つる國、／夕日さす白砵瑯の石の階／そのそこの心の心、－／えめらんど、あるは紅玉、／褐の埴八千層敷ける真底より、／汝が愛を讀へむがため、／また、清き接吻のため、／水晶の柄をすげし白銀の鍬をもて、／七つほど先の世ゆ世を継ぎて／ひたぶるに、われとわが／採りいでし型、／その型を／汝に捧ぐ、／女子（をみなご）よ。」

この詩は、西洋の古い大理石の宮殿にエメラルドやルビーと共に飾られ、地中に埋もれていたクルスを、白銀の鍬で掘り出し、「女子（をみなご）」に捧げようという装飾的な詩である。「女子（をみなご）」が美しいクルスで飾られている。

更に少女賛歌ともいべき詩が「ただ秘めよ」である。

「日ひけるは、／あな、わが少女（をとめ）、／天艸（あまくさ）の密の少女（をとめ）よ。／汝が髪は鳥のごとく、／汝が唇は木の實の紅に没薬の汁（しゆ）滴らす。」

ここで、「密の少女（をとめ）」といい、黒髪の、媚薬を滴らせたような紅い唇と官能的に表現されている。さらに

「わが鴿（はと）よ、わが友よ、いざともに擁（いだ）かまし。／熏（くゆり）濃き葡萄の酒は／玻璃（ぎやまん）の壺に盛るべく、／もたらしし麝香の臍は／汝が肌の百合に染めてむ。」

と、甘い香りの香油の塗られた少女の百合の肌と表現されていき、

「よし、さあれ、汝が父に、／よし、さあれ、汝が母に、／ただ秘めよ、ただ守れ、斎き死ぬまで、

／虐の罪の鞭（しもと）はさもあらばあれ、／ああただ秘めよ、御くるすの愛の徴を。」

と、切支丹の邪教の魅力にたとえて、秘密の恋の快楽に酔い痴れる少女が表現されている。

このように、「天草雅歌」では、主に「乙女」が歌われていた。

「台湾紀行」詩篇には、「台南旅情」「蕃童」「林投節」「台湾青年の歌」「台湾少年行進歌」の5篇が収録されている。

「台南旅情」は

「もの憂さや、老酒（ラオチウ）や、／瓜子（クエチイ）はとり食めども、／にほひなし、昼はまだ／彩燈の切子硝子。」

ここで、「もの憂さ」、匂いのない「瓜子」、美しい切子硝子の燈にもまだ燈が点ってないと美的感情の発露が抑圧されている。続いて

「空（あだ）なりや、／雲に行く日のまぼろし、／ゆゑわかず、うつつなし、／女童は言問へども。」

とは、旅の途中で土地の「女童」に話しかけても、ことばが分からず、とんとぼんやりしていると表現される。続いて

「梅雨ぐもり／影にのみ、蔭たけて、／低くのみ／鳥秋（アアチウ）の飛びたわむと。」

ここで、景色も曇りで、低く飛ぶ鳥の影だけが美しいと晴れない気分が表現されている。続いて

「濡れがちや、／朱の寂びや、／反り棟の礪瓦（いしがはら）、／赤嵌楼。」

は、せっかくの名城「赤嵌楼（プロビンシア城）」も雨に濡れて寂しげである。

最後に

「瓜子（クエチイ）、瓜子（クエチイ）は眼の下の小さ黒子／歯にあてつつ、／歯にあてつつ、／愚かしく美しく時は過ぎぬ。」

と、スイカの種を頬張っている「少女」に旅愁を感じている。

このような幻滅の少女イメージから、次の詩のように、積極的な少年イメージが立ち上がってくるのである。

「蕃童は羗仔（キヨン）を射る。／蕃童は弓矢手ばさみ、／蕃刀を玉と取り佩く。／蕃童は母をうしろに、／敢へて立つ、岩根蹴放つ。／蕃童は朱砂をよろしと、／風向ふ草をよろしと。／蕃童は羗仔（キヨン）を射る、／竜眼の木ぐれうかがふ。」

この詩では、鹿を射る雄々しき少年が表現されている。

「林投節」は、白秋大正時代以来の童謡、歌謡、民謡趣向が表れた創作民謡であるが、次に「台湾少年行進歌」を取り上げる。

「仰げ少年、光だ、風だ、／空だ、僕らが南の空だ／雲よ飛べ飛べ、木瓜（もつくわ）よ実れ、／夏だ、力だ、僕らが島だ。／少年だ、少年だ／台湾少年だ。」

以上が1番の歌詞で「空」を歌っている。以下同様に、2番は「土」を、3番は「山」を、4番は「海」を歌い、5番は

「勢（きは）へ少年、国語だ、歌だ、／道だ、僕らが竝木の道だ、／拳（こぞ）れ稜威（みづ）に、お宮をさして、／夏だ、祭だ、僕らが島だ。／少年だ、少年だ／台湾少年だ。」

と「道」を歌っている。

このように「台湾紀行」詩篇では、主に「少年」が歌われていた。

「天草雅歌」の少女から「台湾紀行」の少年へ、つまり「天草雅歌」が、青年詩人の抒情的でロマンチックな心性が歌われているのに対し、「台湾紀行」では主流が勇ましい意気込みの歌に変化している、とまとめられよう。

時代背景について補足すると、「台湾紀行」の方は、1931年の満州事変に続く1932年の「満洲」建国というような日本国家の海外進出の進展という状況があり、「国民詩人」と目されるようになった白秋が国民を意識し、1929年南満州鉄道の招致による満蒙旅行、1934年台湾総督府と台湾教育会の招致による台湾旅行、1935年大阪朝日新聞社の委嘱による朝鮮旅行というように、国家に近付いた時期であった、ということになる。

注、「天草雅歌」テキストは『北原白秋集』（日本近代文学大系28）角川書店1970年、「台湾紀行」は『華麗島風物誌』（弥生書房1960年）からである。

（文責 浦田 義和）

（2）筑後川上流域の再生可能エネルギー

河内 俊英

筑後川再上流域の小国周辺に再生可能エネルギーの実態調査に行った。調査したのは、以下の3か所である。

①わいた温泉郷の地熱発電所、②馬洗瀬（もうらせ）小水力発電所、③小国の木の駅プロジェクト

①「わいた温泉郷の地熱発電所」

この発電所の事業主体は、全国各地で起きている大資本が土地を購入して乱開発する問題を回避するために、地元の地権者26人で設立された「合同会社わいた会」の発電である。地元の人々が集まり寄合して「おらが村の発電所」を建てた事例である。この地熱発電は、フラッシュ発電方式によって、セパレータ（気水分離器）で蒸気を集め、その蒸気で直接タービンを回して発電する。時間当たり130度の蒸気をおよそ20トン使い、熱水は地中に戻す。井戸の深さは約600mであり海拔0m前後の地中から取り出していることになる。

わいた温泉郷では、過去に大手電力供給会社が地熱発電の立ち上げに向けて数多く試験井戸を掘削しながら、反対者が出て計画が頓挫したことがあった。その反省を生かして、「金銭的なメリットを強調して強引に開発を無理強いするのではなく、地元の地権者である事業主が抱く夢を、地域で共有するという心構えを基にして、時間をかけて合意を形成する」という姿勢によって開発された。

地熱発電は複数あるが、身近なものとして2タイプがある。1つはフラッシュ発電であり、200℃以上の高温地熱流体が発電に適しており、地熱流体中の蒸気で直接タービンを回すものである。もう1つは、温泉熱利用のバイナリー発電で、80℃を超えるような温泉が湧出する温泉地で可能であり、その高温の温泉水をバイナリー発電の熱源として使い、代替フロンなどの低沸点媒体を沸騰させてタービンを回す。発電に利用した後の温泉水は、温度が下がり、浴用に適温となることから、熱の有効利用が可能である。杖立温泉や小浜温泉、別府温泉など各地の温泉で行われている。九電の八丁原バイナリー発電は11万kWと規模が大きい。

見学したのは、上記の「わいた会の地熱発電所」と個人でやっている石松農園の発電施設である。

石松農園では、かつては、高冷地野菜や牛を飼う農業中心だったが、2001年から岳の湯地獄温泉に温泉を開業し、現在は温泉と発電（バイナリー発電）が中心になり農業はやっていない。

②洗瀬（もうらせ）小水力発電所

馬洗瀬小水力発電所は、グリーンコープが、環境エネルギー政策研究所と共に熊本県小国町ですすめていた小水力発電所である。この発電所は、既存の農業用水路を利用したもので、貯水池に水を貯めてその水で発電機を回すものである（22kW 相当）。このような農業用水路を利用した小水力発電は、少し探せば各地にあるのではないだろうか。

久留米でも、かつて水車を回していた小河川があることから、小水力発電は可能であろう。しかし問題になるのは、水利権その他河川利用上の法律による規制が煩雑で、発電に行きつかないことがあるようである。

③小国の木の駅プロジェクト

木の駅プロジェクトでは、山で放置されていた木（林地残材）を「木の駅」に出荷して、山をきれいにし、町が元気になって、地球温暖化ストップに少し役に立っている。このプロジェクトでは、出荷物に対して地域通貨で支払われている。出荷された林地の間伐材や木材は、薪に加工し、燃料として使用することで地球温暖化防止を行っている。木魂館では、薪ボイラーで浴場の湯を沸かしている。従来の重油だけを燃料とするボイラーに比べ、重油の使用量を80%削減することができ、燃料経費が40%削減されている。

地熱発電のしくみ | 日本地熱協会—Japan Geothermal ...

<https://www.chinetsukyokai.com/information>

（文責 河内 俊英）

（3）高良大社所蔵歴史資料（典籍編）

吉田 洋一

2017年度より高良山エリアにおいて、文化財の状況把握と、保存活用のための基礎資料の作成を目的に、久留米市による高良山総合調査が開始された。その第1次調査として、同年より3か年の計画で高良大社所蔵歴史資料調査を実施した。本調査の対象は古文書、美術工芸品、考古資料など多岐にわたり、数量は5,700点余を数え、経石を除いても約4,000点に及ぶ¹。報告者は上記史料群のうち、主に典籍類の調査を行った。以下はその報告書である²。

典籍類は、国指定重要文化財「紙本墨書平家物語」や近世・近代の書冊（和書及び洋装本）の約200点が所蔵されている。前者は「覚一本『平家物語』」と称され、明石覚一（?～1371）の奥書が付されているものである。覚一は南北朝時代の琵琶法師で、一方（いちかた）流の始祖如一に師事して、『平家物語』の詞章の整理統一および新しい曲節の大成に努め、平曲中興の祖といわれる人物である。同書の所蔵が確認されたのは、明治42～3年頃阿蘇惟教宮司の代という。当時文部省の職員であり『平家物語』の調査を担当した国語学者の山田孝雄（1875～1958）は、「何の因果を以て高良大社に伝はり今日まで保存せられ来たりしかは考ふるべき問題なり³」とした。その後書誌的な事項については解明されなかったが、高良大社社史編纂室長（当時）古賀壽氏が発見した『寂春手控』により、もと山城国曼殊院に所蔵されていたものが、寛政9（1797）年、高良山に下賜されたものである可能性が

指摘された。寂春は同大社の目代であった厨家の直系で大阿闍梨をつとめ、同年青蓮院から袈裟が送られた返礼のため上京した際、同書を譲り受けたという⁴。同手控には、

一 平家物語 十二冊 箱入 但応安四辛亥三月口筆を以書与奥書有之 文治元年乙巳年 安徳天皇門司関御入水の今時寛政九丁巳年迄六百十三年 文治元年の応安三庚戌年迄百八十六年 応安四年辛亥年書写の寛政九丁巳年迄四百二十七年二成

右 玉垂宮御神庫相納 (中略) 寛政九丁巳十一月 欣浄院寂春

とあり、応安4(1371)年に書写されたものと、寛政9年に確認されている。なお平成9(1997)年には『高良大社蔵 覚一本平家物語』として、同書の翻字に影印版を付したものが出版されている。

後者の書冊群に関しては、明治以降数度にわたり目録が作成されており、各書冊には複数のラベル(A~E)貼付されている。蔵書の中には、ラベルDの上にラベルAやラベルCを貼付しているものがあり、現時点ではラベルDが近代以降で最も早い時期に調査されたものである可能性が高いが、この時期の分類は「番号、品目、員数」のみである。今回の調査により、ラベルA・C・Dの情報を反映させている『蔵書目録』(昭和16年)が発見されたので、同書にもとづいて書冊群の性格を瞥見する。

同目録の表紙には、「昭和十六年 蔵書目録 高良神社」と墨書、見返しには「本書ハ昭和貳年度起シ蔵書目録ヨリ轉記セルモノナリ」と朱書を付す。ただし同目録の記述は、「昭和三四年二月」に「世界大百科辞典」を入手した記録(「辭典之部」)が確認できるので、その頃までこの目録を活用していたことがわかる。この目録での分類と目録中の各件数は以下の通りである。

道義之部	63件	國史之部	133件	國文之部	115件	禮典之部	27件
漢文之部	10件	法制之部	11件	辭典之部	11件	宗教之部	5件
雑之部	186件						

「道義之部」は、当時の時代背景や目録編集者の意図を反映した書冊群である。『神教綱領』(明治6年刊、道義1)は、神宮史研究・神宮考証学の基本史料であり、後表紙の見返しには、「高良山神道事務局内生徒御中附」(墨書)とある。高良大社内の寄宿生が教科書として活用していた可能性が高い。その他『悟道弁』、『伊吹於呂志』(いずれも文化十年頃刊)、『俗神道大意』など、いわゆる平田篤胤(1776~1843)派の神道書が多く含まれている。この分類について検証することは、江戸時代後期から昭和戦前期にいたる神道思想解明の端緒となりうると思考する。また一神教的に神道を捉える平田派神道の影響が、同大社独自のものか否かということは、他社との比較を俟たなければならない。

「國史之部」は、他の部に比べ散佚が甚だしいが、「六国史」や『大日本史』、『国史略』などと共に、『古事記伝』(天保十五年再校)や『古道大意』(文政七年)などに加え、矢野一貞の『筑後将士軍談』(國史5)も含まれる。興味深いのは、同分類のなかに『醫宗仲景考』(文政十年序、国史43)が含まれていることである。同書は平田篤胤が著した漢代の医家張仲景に関して記した論考で、世界の医術は日本の大国主命・少彦名命より起こると極論したものである⁵。

「國文之部」は、現在認知されている「国文学」関連書冊を多数含み、なかでも『万葉集』の注釈書を中心としたものが大部分を占めるが、『祝詞文例』(明治九年、国文45)、『祝詞演義』(明治十七年、国文47)、『祝詞略解』(明治十五年、国文67)など祭祀関連の文献もみえる。祝詞は文体や書式など

で固有の特徴を持つため、同部に分類されたものと思われる。

「禮典之部」は、当時の神道祭式に関わる基本文献を集めたもので、約三分の一の所蔵が確認されている。『大神宮儀式解』（文化十一年跋、礼典1）は、伊勢内宮の禰宜荒木田経雅（1742～1805）が神宮の故事・慣例を著したもので、近代以降も祭式の参考資料として利用されていたと思われる。

「漢文之部」は、現在「漢籍・準漢籍」として分類される書冊が中心であるが、『日本外史』（明治八年刻、漢文1）なども含まれている。

「法制之部」は、目録には11件の記載がある。近世の書冊では、『令義解』（寛政十二年刊、法制1）や『制度通』（法制2）などが確認できるが、近代以降の『民法大意（上・下）』（明治七年刻、法制3）なども含まれている。

「辭典之部」では、『圓機詩学活法全書』、『音韻假字用例』、『皇國千字文』が確認できる。その他目録中には『康熙字典』や『廣文庫』などの記載もある。

「宗教之部」は、『近世往生伝』（文政十二年刊、宗教1）や『耶蘇一代辨妄記』（明治七年、宗教2）などを所蔵しており、神道関連以外の宗教を分類した意図がうかがえる。

上記の分類になじまないものが「雑之部」に記載されており、洋装本の件数も多い。ただ、後世の整理において他の分類に移動させた形跡も確認できるので、今後は原本の精査などが必要であろう。

なお、各書冊に押印されている朱印で同大社に関わるものとしては、「高良神社文庫之印」、「社院局」、「高良大社」、「神事局」、「國幣大社高良神社社務所印」などが考えられ、中でも「高良神社文庫之印」は全件数の約三分の一の押印が確認されるため、印判の所在を含めた調査が急務となろう。

- 1 穴井綾香「高良大社所蔵歴史資料調査について」（第9回九州山岳霊場遺跡研究会（2019.08.25）紙上報告）
- 2 2020年3月久留米市教育委員会より刊行。
- 3 山中耕作・工藤博子編『高良大社蔵 覚一本平家物語』（アオヤギ株式会社、1997年）2頁。以下、「覚一本『平家物語』」の詳細に関しては、山中耕作識、同書「はしがき」参照。
- 4 篠原正一編『久留米人物誌』（1981年、（株）菊竹金文堂）「寂春」の項参照。
- 5 小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』1999年、大修館書店。

（文責 吉田 洋一）

（4）古賀邦雄河川資料の活用を考える研究会

このたび「古賀河川図書館」の蔵書約1万3,000冊が御井図書館に寄贈された。蔵書の内容は、水資源開発公団（現水資源機構）の職員であった古賀邦雄さんが半世紀をかけて集めた、国内外の河川、湖沼、水に関する書籍等である。

筑後川流域圏研究部会では次のような問題関心からその活用についての研究会が企画された。

第一に、古賀河川図書館は、日本で有数の河川関係コレクションを持つ図書館として位置づけられており、全国から年間約100名の河川の研究者、技術者、国家公務員、地方公務員、大学院生、一般市民などの利用者が訪れている。古賀河川図書館の蔵書を受け入れによって、久留米大学御井図書館がその社会的な役割を担うことができる。

第二に、筑後川流域の中心都市久留米にある本大学が、全国にも稀にみる河川関係蔵書の資料センターとなることは、「地域文化に光を与え、その輝きを世界に伝える」という本学の理念に適うものであり、久留米大学の役割として、非常にふさわしい。

第三に、すでに構築されている「筑後文化資料室」や経済社会研究所、比較文化研究所等と連動させて有効活用することにより、筑後地域の知の拠点である久留米大学の教育と研究に大いに資することが期待される。本学では全学共通教育科目として「久留米・筑後体験演習」や「筑後川流域社会経済論」「九州文化論」「久留米学」などを開講、また各学部でも関連授業やプログラムを開講しており、学生のレポート、卒業論文の作成の際にはデータベースとしての活用が期待できる。また、歴史学、文学、社会学、地理学、文化人類学、経済学、環境学、地域学、法律学、政治学、防災学等の研究を進展させる資料として蔵書を活用することができる。

2019年度に開催された研究会の内容は下記の通りである。

1 「古賀河川図書館」の古賀邦雄さんを囲んでの茶話会

日 時 2019年11月20日(水) 17時から19時まで

場 所 御井本館3階第2会議室

参加者 13名

内 容

まず古賀邦雄さんより「筑後川の治水と利水の変遷史」と題して、筑後川は、大水害や大渇水を経て、ダム建設、放水路・分水路、河川改修などの治水事業、筑後大堰などによる利水事業が展開されてきたことをお話いただいた。特に、久留米大学に敷地を寄付した、ブリヂストン創業者石橋正二郎の水害対応の精神を学ぶ必要性を強調された。その後、蔵書の中身を紹介された参加者からは、外部資金の活用やシンポジウムの開催など多様なアイデアが提起された。



2 「古賀河川図書館」の蔵書の活用を考える研究会

日 時 2020年2月14日(金) 14時から16時まで

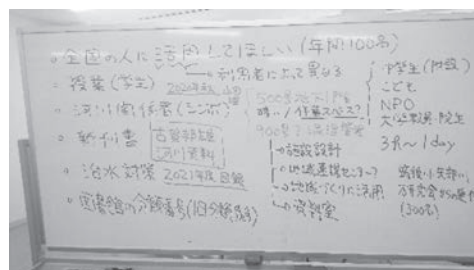
場 所 御井本館3階第4会議室

参加者 13名

内 容

①古賀邦雄さんからの提案

これまで年間100名の来館があったので、これからも全国のひとに活用してほしい（例えば、筑後川流域のこどもたち、附設中学生、NPO、大学教員・院生、行政関係者）。また久留米大学の学生



にも授業の一環として利用してほしい、河川関係のシンポジウムに活用してほしい、水害・治水対策にも役立てほしいなどの提案があった。

②配架について

「古賀邦雄河川資料」は、500号地下1階にスペースを確保し、順次配架する予定で、2021年度まで図書館の十進分類法での目録の完成を目指している。500号館地下の利点は、400～600番台（理工学、産業）の図書や、図書館地下2階の市町村史等の図書との連携ができることである。他方、暗い、作業スペースがない、こどもが利用できないなどの課題もある。現在再活用が検討されている900号館へ設置する案も提起された。ただし、温湿管理のためにエアコンや除湿器の造設、管理者を常駐させるなど管理体制の課題があり、資料室を設けて一部の蔵書のみを移設するという活用案も提起された。

③開設記念シンポジウムの開催

2020年度以降は「中村哲と山田堰」や「帚木 蓬生」（ははきぎほうせい、『水神』の著者）をテーマとしてシンポジウムの開催を検討する。

④その他、大学HPの活用、広報への情報提供、筑後川・矢部川研究会（約300名）へ情報を発信すること、今後もより多くの教員に呼びかけて古賀邦雄河川資料の内容（書籍や動画）紹介、活用を検討する研究会を開催する予定である。

（文責 土肥 勲嗣）

(15) イスラーム研究部会

令和元年11月6日から11月11日にかけて、協定校であるインドネシア国立スブラス・マレット大学の講師ユウン・スネスティ（Yuyun Sunesti）氏を招致し、佐々木との共同で、九州北部のインドネシア人ムスリム・コミュニティーにおける宗教活動についての調査を行った。

その内容は、福岡県福岡市、久留米市、みやま市、大分県別府市の4カ所にて、大学生、大学教員、介護士、工場労働者、主婦など、さまざまな分野に従事する合計約20名のインフォーマント（インドネシア人）と会って聞き取りを行うというものであった。聞き取りの結果、日本に住むインドネシア人ムスリムのコミュニティーの現状をめぐって重要な実態を知ることができた。調査はまだ半ばであるが、令和2年度中に経過報告となる研究ノートを作成する予定である。

令和2年2月28日には、元アフガニスタン大使の高橋博史氏を招いて、講演会を開催する予定であった。しかし、コロナウィルスの感染拡大という非常な事態が進むなか、直前に来年度（時期未定）に延期することを決定した。

（文責 佐々木 拓雄）

(16) 地中海地域研究部会

地中海研究部会は、令和元年度は文学部国際文化学科の大場が中心となり、①外国人研究者の招聘および特別講演と、②西洋近世史学と文化人類学との交流会を企画・実施した。

＜①外国人研究者の招聘について＞

招聘したのは、ノルウェー科学技術大学 (Norges teknisk-natur-vitenskapelige universitet, 略称: NTNU) の歴史・古典学部門 (Department of Historical and Classical Studies) に務めるブリッタ・ケーグラー准教授 (Assoc. Prof. Dr. Britta Kägler) である。ケーグラー氏は、近世ヨーロッパの物質文化に関する新たな国際共同研究の企画を進める目的で、令和元年11月半ばに大場を含む数名の研究者をノルウェー科学技術大学に招聘し、ワークショップを開催したいと打診してきていた。このため、大場はワークショップの直前の10月にケーグラー氏を久留米大学に招聘し、地中海部会との関係で講演をお願いすると同時にワークショップの準備も行いたいと考え、ケーグラー氏の招聘を決めた。

ケーグラー氏は、地中海研究部会との関係で久留米大学に招聘するのに適した人物であった。彼女は大場と同時期にミュンヘン大学の博士課程に通っていた人物で、その頃から研究内容に関して定評があり、学内で彼女の能力は広く認められていた。ミュンヘン大学で博士号を取得した後、ケーグラー氏はイタリアの在ローマ・ドイツ史研究所に3年間勤め、その後、ミュンヘン大学での数年間のアシスタントを経て、ノルウェー科学技術大学の職を得た。国をまたいで就職することが当たり前になっているヨーロッパでも、彼女の経歴は稀有なものである。近年、彼女はヨーロッパのバロック建築の歴史学的探求に特に力を入れており、特に、イタリアからドイツ語圏への技術移転や人の移動の調査、建築のマテリアルな側面の探求、思想的背景の探求などを行っている。この研究をベースに、彼女は地中海地域からヨーロッパの北方へとルネサンスの影響広がった後、バロック様式がイタリアでどのように登場し、ルネサンスにかわる新たな様式としてヨーロッパ全体へどのように受け入れられていったのかを語ることができる。ルネサンスやバロック時代の文化は、ヨーロッパに関心がある久留米大学の学生たちにも人気があり、観光との関係も含め、理解しやすいテーマである。このため、大場はケーグラー氏の特別講演を、大場が担当する「西洋史学Ⅱ」の授業の中に組みこむことにし、この提案を部会員全員に対して行ったところ、快諾を得ることができた。

ケーグラー氏と大場は夏休みの間にメールを交換しながら準備を進めた。準備の際に必要なものは、ケーグラー氏が特別講演の際に使うパワーポイントと原稿の日本語訳である。ケーグラー氏はこれらを英語で準備していたため、大場は部分的に彼女に内容を確認しながら、これらを意識した。準備が整った後、ケーグラー氏は9月30日(月)に福岡空港に到着し、大場が彼女を出迎えた。彼女が久留米に滞在する間は、滞在費の節約のため、大場が彼女を家に泊めることにした。10月1日(火)には、大場はケーグラー氏を大宰府に案内し、九州国立博物館なども訪問して、特に九州とヨーロッパとの歴史的な交流に関する展示物などを紹介してまわった。ケーグラー氏は、久留米大学比較文化研究所の文化財保存研究部会が2018年度にイタリアのローマで行った八女手漉き和紙と久留米緋のプレゼンテーションにも同席しており、日本の歴史や伝統に関心を寄せていたため、実際に福岡でさまざまな文化に触れることができ、大変満足されたようであった。

10月2日(水)の休憩をはさんだ後、10月3日(木)の4時限目の「西洋史学Ⅱ」の時間に、ケーグラー氏は11A教室で特別講演を行った。題目は、「Baroque Architecture: Cultural Transfer from Italy to Germany — and on to Scandinavia?」というものであった。この特別講演は、地中海研究部会の会員も拝聴することになった。講演は、学生の英語の聞き取り能力を考えて、前半と後半に分けられ、

途中休憩をはさむ形で行われた。また、前半と後半の話のあと、大場が口頭で講演内容を手短にまとめ、学生がより深く理解できるように支援した。特別講演の後には、学生にコメントシートを配布して感想などを記入させた。日本語訳も配布していたためか、予想以上に多くの学生が内容を理解していたようであった。学生の中には、「ヨーロッパの方からヨーロッパの歴史を習うというのはとても新鮮で、興味深かった」といった感想を寄せている者が数名おり、全体として「楽しかった」という感想が多かったため、ケーグラー氏の招聘は学生にとっても有意義なものであったと言えるだろう。特別講演の後、今回の講演に関する意見交換や地中海文化の研究に関する話を深めるため、地中海研究部会の会員も同席する形で、懇親会を兼ねた情報交換会が「梅の花」の本店で開催され、活発な意見交換や質問が行われた。なお、この情報交換会の会議費と、ケーグラー氏の渡航にかかった往復航空券代を、比較文化研究所の部会費より支出させていただいている。

その後、ケーグラー氏は数日間京都を訪れ、10月9日(水)にノルウェーに帰国した。その後、11月14日(木)には大場がノルウェーを訪れ、共同研究に向けたワークショップに参加し、有意義な学術交流が今日まで継続できていることも追記しておきたい。なお、ケーグラー氏はその研究業績を認められ、2020年の秋からは、ドイツの某大学に教授として着任する予定である。

＜②西洋近世史学と文化人類学との交流会＞

11月のノルウェーでのワークショップ参加後、大場は12月1日(日)に、地中海研究部会の会員で文化人類学を専門とする神本と、異分野交流会を催すことにした。これは、学際的な共同研究が近年ますます奨励されていることを鑑みて開催されたものであり、今回は、西洋近世史学と文化人類学との対話を目的としていた。この催しは内容的には地中海とは関係していないが、一見相容れない分野の研究者が交流することにより、個々の研究者の研究を理論面で充実させたり、斬新な研究視角を新たに発見したりすることができないか、という期待の下で実施された。この交流会のため、大場は武蔵大学の踊共二（専門：近世ヨーロッパの移民と再洗礼派の歴史）と、特別研究員 PD（現在は CPD（国際協力強化研究員））の安平弦司（専門：オランダ近世史）を招聘し、神本は、岡本圭史（専門：ケニアの妖術）と、国際ファッション専門職大学講師の河西瑛里子（専門：現代イギリスのスピリチュアリティ）を招聘することになった。招聘のための旅費は、部会の予算ではまかないきれなかったため、大場と神本の個人研究費などから支出されたが、交流会の後に懇親会を兼ねた情報交換会が開催されたため、この会議費を比較文化研究所の部会費より支出させていただいた。この交流会での議論の内容や今後の展望については、久留米大学の紀要（国際文化学科編）に大場と神本が共著で報告を出す予定であり、準備が進められている。

（文責 大場 はるか）

2. 比較文化研究所 研究員発表会（2019年度）

1) はじめに

第14回目の実施となった2019年度は20名の研究員のうち内の19名（後日3名）が発表を行いました。

2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日 時：2020年2月3日(月) 9:20～14:50

②会 場：御井本館6階 166教室（A会場）、167教室（B会場）

③タイムスケジュール

- (1) 9:00～9:20 受付
- (2) 9:20～9:30 開会挨拶
- (3) 9:30～12:10 研究発表
- (4) 12:10～13:00 休憩
- (5) 13:00～14:30 研究発表
- (6) 14:35～14:50 閉会挨拶

④発表形態

1人30分（口頭発表25分 質疑5分）

原則として各グループ毎に座長を交代する

座長、ベル（タイムキーパー）係は基本的に研究員が交代で行う。

3) 2019年度 比較文化研究所 研究員研究発表会 演題一覧

(166教室 御井本館6階)

グループ① 9:30~11:00

座長: 池田 博章 時間・ベル: 中畑 義明

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-1	9:30~10:00	東南アジアにおける自然エネルギーへの転換についての考察	陳 宥蓉
A-2	10:00~10:30	近世の筑後川洪水による久留米藩への石高被害の算出に関する一考察	篠倉 大樹
A-3	10:30~11:00	律令期の国府・国分寺の立地に関する一考察 —ハザードマップからみる水利との関係—	高木 恵

グループ② 11:10~12:10

座長: 陳 宥蓉 時間・ベル: 篠倉 大樹

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-4	11:10~11:40	地方自治体における温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度に関する取組みの現状と課題	藤原 綾子
A-5	11:40~12:10	核店舗が撤退した中心商業地の変容と存続条件 —地方拠点都市・M市を事例として—	若杉 優貴

グループ③ 13:00~14:30

座長: 高木 恵 時間・ベル: 藤原 綾子

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
A-6	13:00~13:30	会計観と会計基準の関係に関する考察 —研究開発費会計に焦点をあてて—	中尾 隆太
A-7	13:30~14:00	子どものQOLと問題行動(SDQ)の関連性に関する検討	池田 博章
A-8	14:00~14:30	牛島謹爾と通称「排日移民法」	中畑 義明

(167教室 御井本館6階)

グループ① 9:30～11:00

座長：田中 京子 時間・ベル：城戸由香里

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-1	9:30～10:00	地域在住の高齢者における来世信念と脳形態画像解析結果の関連	今村 義臣
B-2	10:00～10:30	日本語教師の課題と新たな可能性の予備研究	松田 輝美
B-3	10:30～11:00	入院治療中の小児がん患者の家族における心理的負担	吉良 晴子

グループ② 11:10～12:10

座長：今村 義臣 時間・ベル：松田 輝美

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-4	11:10～11:40	自己に取り入れる内集団特性の量と内容による集団同一視の変化	赤須 大典
B-5	11:40～12:10	ロールシャッハ・プロトコルからみた ASD の反応様式	天満 翔

グループ③ 13:00～14:30

座長：赤須 大典 時間・ベル：天満 翔

No.	時 間	発 表 演 題	発表者
B-6	13:00～13:30	継時的想起における後期高齢者の自伝的推論の再現性	田中 京子
B-7	13:30～14:00	認知症介護における「触れるケア」の導入 —睡眠障害軽減への可能性—	城戸由香里
B-8	14:00～14:30	ネガティブ感情喚起後の時間経過が有効視野の広さに与える影響	増田奈央子

3. 日誌（2019年度）

2019年（令和元年）

- 4月4日（木） 比較文化研究所運営会議
- 4月24日（水） 比較文化研究所会議（書面）
- 6月19日（水） 比較文化研究所運営会議
- 6月20日（木） 比較文化研究所会議（書面）
- 11月6日（水） 比較文化研究所運営会議
- 12月18日（水） 比較文化研究所会議（書面）

2020年（令和2年）

- 1月10日（金） 比較文化研究所運営会議（書面）
- 1月27日（月） 比較文化研究所会議
- 3月5日（木） 比較文化研究所運営会議（書面）
- 3月25日（水） 比較文化研究所会議（書面）

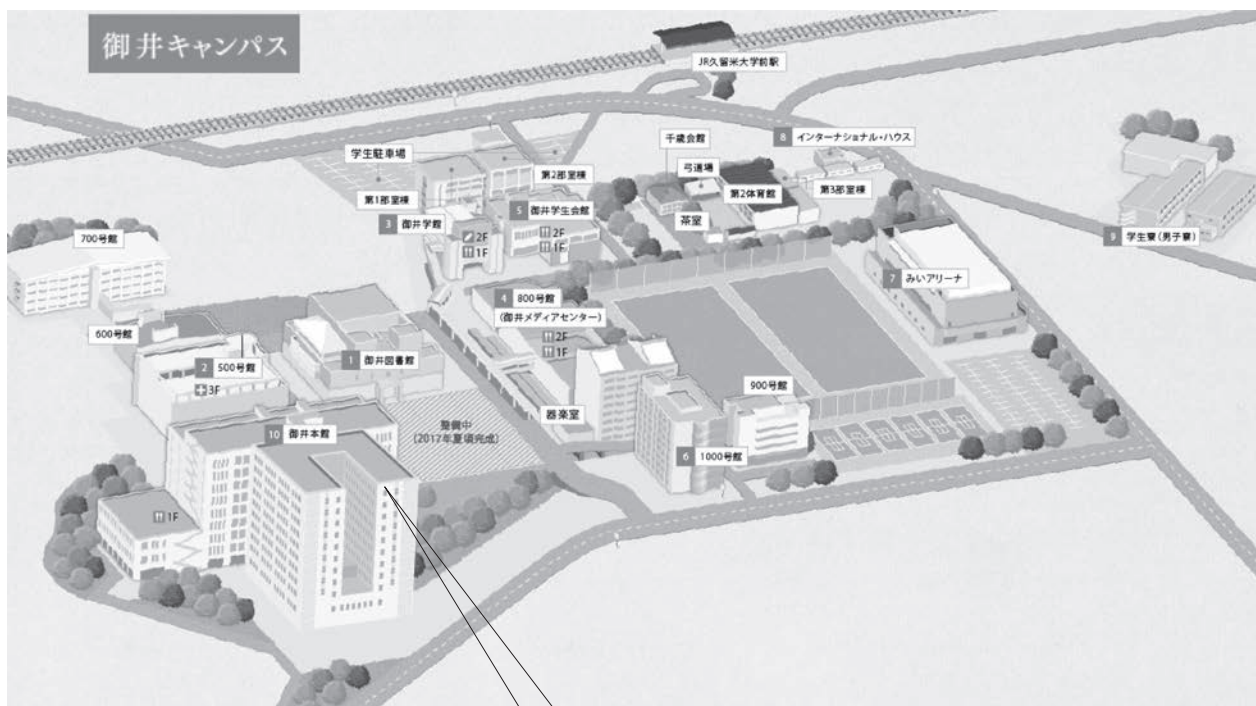
※部会活動を除く

施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2015年3月に現在の御井本館8階に移動しています。研究所の部屋は3室あり、それぞれ研究所長室、会議・研究会用、および資料室・作業室として使用しています。専任所員の研究室は御井本館6階となっています。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する図書が保管されています。これは、元佐賀テレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。

〔案内図〕



御井本館 8 階

- 比較文化研究所長室
- 研究室
- 共同研究室